

次 目

風雪を冒して……………	本多日生
佛界の實相(一)……………	河合涉明
聖祖の新年觀……………	儀部滿事
人生と法華經(其四)……………	池ノ内三雄
梶木師を憶ふ……………	岩野直英
法華經講話(第二十五講)……………	小林一郎
偶 吟……………	大八木義雄
記事 ○本部團報各地教信 ○寄附維持金團費誌料領收	

號月正 年一十四第

統

一

法身團
統

團發行

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ執行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系のニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金多百圓以上又ハ毎年金五百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五百圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ離出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

風雪を冒して

本多日生

今日は生憎の天氣で、まことに寒さもきついことであり、風雪盛んな場合でありまして、諸君の參詣せらるゝといふこともなかく、困難なことであつたと思ひますが、併し特別の志を以て斯様に御參詣に相成つたといふことは、如何にも感すべき至りであると思ひます。無論宗教の信仰は如何なる場合にも貫き通すべきものだといふことは、原則として誰しも心得て居ることでありませうけれども、今日のやうな寒さ又は風雪といふことになりますると、どうしても遅れ勝になるのが人情であります。然るにそれを突破して斯様に參詣せられたといふことは洵に信仰の強いことと思ふのであります。寒さとか雪とかといふことに就ては、随分歴史上に感激する事柄があるのであります。世間の歴史のことは暫く措いて、日蓮聖人の傳記に就て稽へても、最も刺戟の強いのは佐渡の風雪でありました。御承知の如く塚原三味堂は一間四面の辻堂と申す小さなもので、さうして周圍は藪の古いのが下つて居るやうな譯で、屋根は板が葺べてはあつたけれども、それが腐つて、さうして其處から雪が降込むのである。御承知の

通り雪といふものは風がありますと少しの隙間からでも這入るのであります。左様な席で圍うて屋根が腐つて居るやうな一間四面の堂の中に居られたといふことは、佐渡が鳥のあの雪の多い北海に於てはなか／＼堪へ難いことであつたと思ふのであります。故に聖人は義を着て明かし暮すと仰せられて、辻堂の中にお居になつても義を着て居られたのであります。さうして其中に在つて最も立派な思想を發表せられたのである。佐渡に著かれたのが文永八年の十一月でありましたが、それから翌年の二月にかけて、舊曆でありますから洵に寒い最中に書かれたのが開目鈔二巻であつて、其の開目鈔の中に最も大事な教義を示されて居る譯であります。開目鈔の眞筆は身延山に在つたのであります。遺憾なことに明治八年の大火に其の御眞蹟を焼失したのであります。聖人の眞蹟は數多く、現在中山の法華經寺其他に保存されて居るのでありますけれども、最も大事な開目鈔が身延に於て焼失した。其の當時七十何通といふ眞蹟を烏有に歸したのであります。併し焼けない前に其の眞蹟を拜覽した人は段々あるのです。私共は目の當り開目鈔の眞書を拜見せられた人達から話を聞いて居るのであります。最も立派に書かれて居つたのである。日蓮聖人の精神の現はれは其の文字の上に潑刺として遺つて居つたのであるが、焼失して今其の形を見ることが出来ぬのは、どうも残念なことでありますが、それが今言ふ佐渡の雪の中で成されたのであります。日蓮聖人の傳記中龍の口の首の座が一番はげしいやうに考へる人もありますけれども、それは一時のことで、『頸切るべくばいそぎ切るべし夜明けなば見苦しかりなん』

と叫んで居る、其の瞬間に迅雷風雨俄に臻つて、遂に首斬ることが出来なかつた。さうなれば覺悟して居つた日蓮聖人に取つては首を斬られたにしても斬られなくなつたにしても、それは短い時間であつたからしてさう堪へられぬこともなかつたとも言はれるのである、通常人から言へば首斬られるといふことは非常にえらいことであるけれども、一旦覺悟せられて見れば大した苦しみを感ぜらるゝことはなかつた譯であらうと思ふ。佐渡の方はどれ程決心して居られても、チリ／＼と寒くなつて来るばかりで、一間四面の辻堂と言葉で言ふから氣が利いて居るけれども、一間四面は疊二疊敷である、圍りに蓆が下がつて居る、其處は塚原三味堂といふて、死人を焼く焼場の傍に建つて居る藁小屋の中に居つた譯である、そんな所で雪が最もひどく積る、杉の木が生ひ茂つて居つて晝尙ほ暗しといふ程で、日の當らない所である。それで晝のうちでも無論寒いけれども、夜の夜中になつて二時三時といふしん／＼と冷えて晝つて来る時分には、齒がみをなして明かし暮らすと言つて居られる、ギリ／＼と齒を食ひしばつて忍耐をせられた。開目鈔の中にも「當時の責は堪うべくもないけれども」といふことが書いてある、どうも堪へきれない程に烈しく感せられたことがあつたらうと思ふのであります。「今年今月萬一難く脱身命一也」と顯佛未來記には書かれて居るのであります。寒さが段々ひどくなつて来て、もう此月は到底生きて越すことは出来ないといふ覺悟をせられたこともあつた位である、左様に日蓮聖人の御一代中に於ては龍の口よりも佐渡の風雪艱苦といふことがすつと御困難であつた。從容として義に赴くと申しませす

が、これはなか／＼出来ることでない、慷慨死に就くは易く從容義に赴くは難しと申してありまして、なアにと云つて一時の興奮によつて首の座に坐ることは寧ろ出来ることであるけれども、從容として前後四ヶ年に亘つて不自由な塚原三味堂に御居でになつたといふことが、日蓮聖人の御一代中最も辛い御難であつたと思ふのでありまして、さういふことを考へれば、今日此處へ来るのは、なか／＼電車の待合せといふことも辛いけれども、時間が短かいのであるから、塚原三味堂に在つて夜夜中しん／＼と骨身に滲む寒さを忍ばれたことから較ぶれば何んでもないので、愈々寒ければ蕎麥屋へ行けば暖かい蕎麥でも持つて来るが、塚原三味堂には食を與へずしてとある、食が無いのである、當時の流人には生活の保障をしないのである。併し日蓮聖人が他所へ奉公して下人の代りをして飯を食ふ譯にも行かぬ、塚原三味堂に蟄居せられて居る限り食物は無い譯である、それで悪口を言ふ者は其の當時日蓮聖人は何を食つて居つたか、蛙でも叩き殺して食つて居つたらう、小便でも飲んで居つたらうといふやうなことを書いて悪口を言つて居る書物もある、それは低い人に取つては聖人の徳を汚すことになるかも知れぬけれども、吾々は左様なことを言はれる程、日蓮聖人が辛酸を嘗めて居られたといふことに於て一層感激を深くする次第である。それで御承知の通り千日尼、それに遠藤爲盛が阿佛房と稱するのであるが、此人が順徳天皇の御陵を護つて居つて、忠義な人でありすが念佛の信者であつて、日蓮聖人を憎んで居る、それで聖人を殺さうとして塚原三味堂に忍び寄つたけれども、不意打に黙つて殺してしまふのは武

士としては卑怯な行爲であるから、面と向つて其の不都合を難詰して、さうして答辯が悪ければ首を斬る、こらへて呉れと云へば許してやつても宜いといふ譯で三味堂に這入つて大聖人にお話を始めること、日蓮聖人は勤王の方である、一方は法華經に竭されるが、一方は天皇に盡される所の、國家の方から言へば則ち忠節の士、教の方から言へば則ち護法の戰士であるから、そこでお話になつた、あなたは順徳天皇の御陵を護つて居られるさうであるが、日蓮が鎌倉を攻撃したのも、三天皇を流し奉るやうな悪逆をするから攻撃したのである、其の方が強い意味になつて日蓮が流されたのである、あなたのやうな忠節の人から日蓮が憎まれるのは解し難いことだといふやうなことが話の端緒であつたと思ふ、段々話すに従つて遠藤爲盛が感激した。それだといふと法華經の教と同じやうなことだ、つまり今の精神は日本では天子様を大事にするか、鎌倉を大事にするか、教で言へば本佛を大事にするか述佛を大事にするかといふことにあるので、釋尊を大事にするか權教を大事にするかといふことが分らぬやうでは今の日本武士は勢力ある鎌倉あるを知つて天皇を忘れると同じやうなことになるはしないかといふやうな話をされたであらうと思ふのであります。そこで阿佛房は一逼に感心してしまつて、これは斯ういふやうなえらい人を北條が流したといふことは不都合極まるといふことから、家へ歸つて自分の奥様に話されて、食物も不十分だといふことだから是れからお前が食を運ぶやうにといふことであつたので、其の雪の降つて居る所を日が暮れてから千日尼が運んだ、千日に亘つて間斷なく毎日通つたといふので

千日尼なる號を賜はつたといふ、其の間のことを考へるといふと洵に感激の多い次第であります。日蓮聖人は魚のやうなものは食はれない、精進の食物であつたから何でも差上げる譯に行かぬ、佐渡ヶ島のやうな所で雪の降つて居る時は、海魚のやうなものを食へば澤山の食物はあつたでせうけれども、それを召上らぬといふと食物はない、千日尼が拵へて運ぶと言つた所で豆腐でも煮てあれば上等の方であつたと思はれる。さういふ簡素な生活の中に何處までも法華經の爲め、日本の爲め、一切衆生の爲め、といふ立派な精神を貫き通されて、其の寒さが身に沁むに就て道念といふものを益々發揮せられたのである。志が貫いて居れば雪が降つたり寒かつたりすることも却て其の志を反撥せしむるものである。炬燵の中で白酒を飲んでウト／＼するやうになると慷慨悲憤の精神は幾らか弱るけれども、風霜凛烈たる寒氣の中に居れば一層其の志といふものは強く現はれて來るのであります。

また佛法を天竺に求めた求法沙門の中にえらい人がありますが、法顯三蔵の傳に自分で書かれたのであるが、長安の都から一緒に志を立て、行つた慧景といふ坊さんがある、それが一緒に彼の流沙河を越え、それから葱嶺の山を越えて、さうして天竺を歴遊するのであります。流沙河といふのは是れは河ではないので沙漠であります。風が強くて砂の飛ぶのが水の流れるやうに見えるから、沙を流すと書いてある、流沙河といふけれども河ではない沙漠である、其の沙漠を通過するに丁度十七日間かゝつて居りますが、實際に道しるべがないのである、十七日間もかゝるやうな沙漠で、草木もなければ水もない、見渡す限り漠々たる砂つ原であるから方角が能く分らぬ、道が無いのであるから何處を歩んで行つたら近いのか、何處を真つ直に行くか分らぬ、それで非常に困るのである、道行く時の道しるべがない、どつちへ行つて宜いか全く分らぬ、其の時分の目標とするものが書いてあるが、それは死んだ人間の骨がある、それを目標に行くのだといふことが書いてあります。旅行者が途中で水が無くなる食物が無くなる、又病氣になつて死んだといふ所には、其處で倒れて死んだ儘過ぎて居るから其處には人の骨がある、それで人の骨のある所を途として進んで行くといふことが書いてある、えらい所です、十七日間も沙漠を通るといふことになりまして、水が無くなればどうすることも出来ない、非常な困苦を嘗めて行くのである。併し是は雪に關係のない話であります、それから葱嶺を越える、葱嶺といふのはヒマラヤ山、此の大ヒマラヤを越すには三十日以上もかゝる、其の山は夏でも氷が一ぱいある、雪が氷になつてしまつて居るので、氷の上に寝て氷の上を歩いて三十日もかゝつて越えて行く、それが氷が迂つて行く崖になつて居る所がある、何十丈といふやうな崖の所へ出くわす、それを見ると眼がくらんでしまふと書いてある、ヒマラヤは世界第一の山であります、其の氷の壁立千仞といふやうな所に出くわす、それに向へば眼眩まんどすといふことが書いてある、見たゞけでばうとしてしまふ、無論道もないそれを辿つて行くと梯が掛かつて居るやうな風になつて居る所がある、さういふやうな危ない眼のくらむやうな、一足踏外せばそれきり死んでしまふやうな所が七十何箇所ある、さういふ所を一箇月も旅

千日尼なる號を賜はつたといふ、其の間のことを考へるといふと洵に感激の多い次第であります。日蓮聖人は魚のやうなものは食はれない、精進の食物であつたから何でも差上げる譯に行かぬ、佐渡ヶ島のやうな所で雪の降つて居る時は、海魚のやうなものを食へば澤山の食物はあつたでせうけれども、それを召上らぬといふと食物はない、千日尼が拵へて運ぶと言つた所で豆腐でも煮てあれば上等の方であつたと思はれる。さういふ簡素な生活の中に何處までも法華經の爲め、日本の爲め、一切衆生の爲め、といふ立派な精神を貫き通されて、其の寒さが身に沁むに就て道念といふものを益々發揮せられたのである。志が貫いて居れば雪が降つたり寒かつたりすることも却て其の志を反撥せしむるものである。炬燵の中で白酒を飲んでウト／＼するやうになると慷慨悲憤の精神は幾らか弱るけれども、風霜凛烈たる寒氣の中に居れば一層其の志といふものは強く現はれて來るのであります。

また佛法を天竺に求めた求法沙門の中にえらい人がありますが、法顯三蔵の傳に自分で書かれたのであるが、長安の都から一緒に志を立て、行つた慧景といふ坊さんがある、それが一緒に彼の流沙河を越え、それから葱嶺の山を越えて、さうして天竺を歴遊するのであります。流沙河といふのは是れは河ではないので沙漠であります。風が強くて砂の飛ぶのが水の流れるやうに見えるから、沙を流すと書いてある、流沙河といふけれども河ではない沙漠である、其の沙漠を通過するに丁度十七日間かゝつて居りますが、實際に道しるべがないのである、十七日間もかゝるやうな沙漠で、草木もなければ水もない、見渡す限り漠々たる砂つ原であるから方角が能く分らぬ、道が無いのであるから何處を歩んで行つたら近いのか、何處を真つ直に行くか分らぬ、それで非常に困るのである、道行く時の道しるべがない、どつちへ行つて宜いか全く分らぬ、其の時分の目標とするものが書いてあるが、それは死んだ人間の骨がある、それを目標に行くのだといふことが書いてあります。旅行者が途中で水が無くなる食物が無くなる、又病氣になつて死んだといふ所には、其處で倒れて死んだ儘過ぎて居るから其處には人の骨がある、それで人の骨のある所を途として進んで行くといふことが書いてある、えらい所です、十七日間も沙漠を通るといふことになりまして、水が無くなればどうすることも出来ない、非常な困苦を嘗めて行くのである。併し是は雪に關係のない話であります、それから葱嶺を越える、葱嶺といふのはヒマラヤ山、此の大ヒマラヤを越すには三十日以上もかゝる、其の山は夏でも氷が一ぱいある、雪が氷になつてしまつて居るので、氷の上に寝て氷の上を歩いて三十日もかゝつて越えて行く、それが氷が迂つて行く崖になつて居る所がある、何十丈といふやうな崖の所へ出くわす、それを見ると眼がくらんでしまふと書いてある、ヒマラヤは世界第一の山であります、其の氷の壁立千仞といふやうな所に出くわす、それに向へば眼眩まんどすといふことが書いてある、見たゞけでばうとしてしまふ、無論道もないそれを辿つて行くと梯が掛かつて居るやうな風になつて居る所がある、さういふやうな危ない眼のくらむやうな、一足踏外せばそれきり死んでしまふやうな所が七十何箇所ある、さういふ所を一箇月も旅

行して行く、雪や氷の中の旅行であるけれども、其の時は無事に通り越したのであるが、其後段々旅行を続けられて、今度は小雪山といふ所がありますが、其の小雪山を越す時に吹雪に出會つたといふことが書いてある、寒氣凛烈もう體中凍えてどうすることも出来ない、慧景は凍えてもう其處で動けなくなつたのであります。慧景が倒れてしまつたから法顯三藏が傍に行つて、しつかりせい、しつかりせいと云つた所が、其の時に慧景が言ふのには、あなたそんなことを言つてグズグズ言つて居つたならば、あなたも凍えてしまひます、私はもうどうしても駄目です、起つことは出来ない、だからしてもう一分間でもそんなグズグズしないで、あなたは早く先に進んで貰はなければ、あなたも凍えてしまつて二人とも此處で死んでしまつてはならぬ、私のことはもう構つて貰つた所が仕方がないから、最早斯の如くなつたのは私はこれが命數である、佛法を求めて雪の爲に死ぬといふことは、私に取つては何の遺憾もないので、一身を茲に捧げて終りに達したことであるから、どうぞ構はないで早く行つて下さいと言つたけれども、法顯三藏は之を見捨て、行くに忍びないので、慧景の背を撫で、ナニ大丈夫だ、俺は大丈夫だ、お前はこれが最後なら俺が御經を讀んでやるからしつかりしろ、俺はまだ凍えるやうなことはないからと云うて聽かす、其うちにどう／＼死んだので御經を讀んで、さうして其處を立つて行かれる、其時の感慨が書いてあります。其の人間と別れて淋しくなるのみでなく、長安の都を出てから其處まで何年となく一緒に旅を續けて來た人間が死んで何とも仕様がなく、悵然として其處を去る時の感慨

は何とも言へない淋しいといふことが書いてある。併し一方目的を達しなければならぬ、氣が弱つてはならないといふので、其時佛を念じ、信心に満ち切つて、さうして其處を立去るのであります。法顯三藏が雪の中に於て慧景と訣別の一卷は、私其の文章を讀んで非常に感じました、あなたグズグズして居つては駄目です、一刻も早く行つて下さいといふ、大丈夫だと言つて其處に留まつて居る、二人の精神の通うて居るあの有様は實に美しいものだ、人生のあらゆる美しい事の中のこれは花だと思ふべきものと思ふのであります。雪に就てはそんなことがいろいろありますが、ちよつと今日蓮聖人の塚原三昧堂のこと、法顯三藏の小雪山のことを思ひ出しましたから、あなた方が雪の中を斯うして來られた、昔も雪の中をやつて來る人はえらい人で、あなた方もさういふえらい人の中に這入つたのだといふことを申上げたのであります。

謹賀新年

併而祈各位御健勝御清授

財團統 一 團

幹部 一 同

佛界の實相(一)

佛子河合陟明

- ★ 諸の衆生に、種種の性、種種の欲、種種の行、種種の憶想分別有るを以ての
- ★ 故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因縁、譬諭、言辭を以て種種
- ★ に法を説く、作す所の佛事未だ曾て暫くも廢せず。

一、生に對する種々の人格的態度(一)

凡そ高き睿智や深き思想は、一切の存在の根本として、我々の自己を反省し探求する處から生れるのである。外に眺むると、内に考ふるとは、知識の二つの態度であるが、古來の宗教や哲學の主流は、概ね後者の立場に立ち、以て人類思想の高嶺を形造つて來たのである。東西に亘る精神文化の歴史は、人間の頭腦と心情との最良の蓄積所である。しかも其

は巨大なる聖賢の傳記であると同時に、辛酸を極めし誤謬の剝奪史でもある。深き尊敬と感謝を拂ふべき動高き開拓路であると同時に、極めて警戒を要する難路でもある。

人間が動物であるならば、彼は知識の悦びといふものを經驗せない。たゞ本能の命するまゝに動くまでである。人間が神であるならば、彼は無過程にして絕對に入つてゐるのである。こゝには知識の苦みといふやうなものは經驗されやうがない。幸か不幸

か人間は動物でもなければ神でもない。かるが故に人は知るが爲に悦び、知らんが爲に苦む。迷ひつゝ善を求むるは人間の運命である。彼が生死の運命といふものを知ることがなければ、生死の爲に苦むといふこともなからう。然しまた人間は生死といふものを知ることによつて、生死を超越るといふこともできるのである。知は悩みであり患ひであると同時に、知は解脱であり、救済であり、超越である。知は連續であると同時に、飛躍である。知は生命の苦悶であると同時に、知は人格の自由を意味する。自覺なき知識といふものは有り得ないのである。たゞ我々は一擧にして思想上のアルプスを踏破することはできない。一步々々その險路を辿る外はない。

へく／＼と尋ね求めつゝ、遂にはやがて果てしなき未來の光明に輝く絕對の全貌を把握すべく約束されてゐるのではないであらうか。知る作用と知らるゝものとの無限なる合一が、知識そのものゝ根本的意義、或は要求ないし本質ではないであらうか。知識の論理的構造そのものが、部分的認識より存在の全象を體驗すべき内面的必然性を有するのではないであらうか。否自らは何等の作用き出づることなき全く「無力なる鏡」が、しかも一切を自らに攝め入れまた映し出すのである。たゞかくの如き鏡は、猿が覗き込んで人間顔は現れては來ない。それはたゞ心垢の滅するに在るのみである。

然しながら其は如何にして可能なのであるか。有無起滅の妄想を以て、絕對なる覺の境界を認識せんとするならば、その覺そのものもまた流轉の迷に同するであらう。かくの如き迷見を以て輪廻を免がるゝことができるといふならば、其は失當の論斷であ

る。いはゆる神を人間の側より見るのみでなく、神を神自身の側より見るといふことは果して可能なことであらうか。もし自己の目が動轉して止まないならば、湛然たる水も到底静かならざるべく、心識妄想にあるならば、絶対の認識は得ることができない。然しまた眼は定まつて動轉せずとも、旋轉して止まざる火光に對すれば、たゞその輪相を見て火の一點を看取し得ないであらう。無限大の遠力を以て走る圓周上の一點は、宛も静止せると同様である。

實在の認識は單に動眼には得られない。其は湛然たる明鏡止水の立場に於てゞなければならぬ。然し空間そのものに就ては何等の形をも論ずることができないが、其は一切の形あるものを容るゝ意味に於て形以上の形と言ふことができるやうに、變化して止まざる存在の運動を諦観する知識の立場は、また動以上の動でなければなるまい。其は無限に動的なるものにして、何等の靜的なる痕跡を残さぬといふ

ことでなければならぬ。運々たる心識の作用を以て絶対智の真相を見ることができらるであらうか。螢火を取つて須彌山を燒かんとするも、燒く能はざるが如くに、輪廻の心に於て輪廻の見を生じて覺者の大寂滅海に入らんとするも、終に至ることができないであらう。在迷纏縛の凡夫がその迷執を脱却することは果して可能なことであらうか。

オラムブスの山上より神々の靈火を奪ひ取つて、これを下界の子に與へたプロメテウスの出現以來、しだいに人類は倨傲なる存在となつた。彼等は神の真相や、絶対の實在や、宇宙の内奥や等を探らうと努め、また探り知り得ることを信じ、ないし知り得たと信じた。

近世初頭に於て、人智は果してかくの如き超越的無限の存在を認識し得る權能があるか否かといふことに就て、批判的考察が下さるゝに及び、人は謙虛たらねばならぬことを教へらるゝに至つた。絶対そ

のものを知識の對象として、宇宙論や本體論や目的論や、ないし神に關する理論的思索に耽つてゐた古代及び中世の哲學に對して、知識の限界を吟味し反省して、哲學は理性の批判的我れ考察なるものとならしめたカントのいはゆる認識論は、かくの如き人間の對宇宙的態度を轉回すべく警告を與へたと同時に、他面また或意味に於ては、より一層大いなる意義を有する思想的轉回を哲學の歴史に與へた。彼は一面に於て失ひ捨て、他面に於てまた遂に麻痺得た彼はいはゆる過渡的な超越的な神の認識を理論の世界より斷念すると同時に、經驗的外的客觀界を大いなる我れの下に攝めた。自己は自然の律法者となつた、其は先驗的自我の統覺作用の産物として、自己の構成するものとなつた。彼はこゝに人格の意義を發見したのである。

而もこのいはゆるコペルニクスの轉回は、かのコペルニクスが、古來の迷想を破つて地動説を唱へ、

人間を宇宙に於けるいと小きものとしたのと全く相反して、大自然を包み超ゆる人格の權威を確立したのである。人格の自由——自然に對する人間の高次の優越が、理論的に證明せらるゝに至つた。人間は單に自然界に於ける一成員に過ぎない、こいふやうなものではなくなつた。神への道に於ては否定的に人智の限界を承認し、自然界に對しては積極的に人格の尊嚴を主張した。宇宙に於ける人間の地位は、けだしこのやうな中間的立場に在るのであらう。

然しカントも全く神の存在を理論的認識の立場より拋棄したわけではない。彼はあらゆる思惟の對象の絶対的統一として神を認め、しかもその積極的基礎づけを、道德的意識の要請として立てた最高善の實現に於ける目的論に基かしてゐる。たゞ然し彼が純粹理性に於ける二律背反を論じ、先驗的假象を説けるあたりは、苟くも絶対的實在を考察せんとする何人もが、深甚なる省慮を拂ふべき問題であら

う。理論の世界に於て論理的過誤を侵しながらも立てざるを得なかつた物、自體の問題は、實踐理性の領域に於ては倫理的、人格の靈光を賦與せられて神聖なるものとなり、更に美的判断の立場に於ては目的論の原理となつた。宗教性に關しては、彼は「單なる理性の限界内に於ける宗教」に於て根本悪は自由意志に基く、これあるに由つて善を爲すと共に善に背き得る、善と惡との兩者に對するの自由——それは即ち人間が叡智界と感情界との二世界に跨ることの謂である。こゝに人間の性格に叡智的性格と經驗的性格との二面を論じ得る。而て心、情の變化によつて善となるのが、叡智的性格に於てのみ可能である。こゝに再生——更生の原理がある、更生によつてその高次の世界に入るのが宗教である。而てその力がキリストの力である、其は智、情、意によつて求められるものである」と述べてゐる。然しながらそれは尙ほ要請に止まつて、神の直觀

は得られない。また宗教的そのもの、價値を何處に求め得るか、カントによれば、道德的善に達するから宗教は尊いとされて了ふ、宗教は究極に於て倫理の補強機關に過ぎない。單に道德的に善くなるが故に宗教に價値があるのではない、更生そのものに價値があるのでなければならぬ。従つて更生の内容、更生によつて把握したる對象の積極性、その主觀に及ぼす感化、ないし更生による全存在の意味の更新いはゆる廻心の深き秘義が、こゝに存するのでなければならぬ。

「カントほど知識の權威を重んじた人はない、そのカントが更に知識の立場を尙ほ一步超えて、實踐理性の優位を斷じ、信仰に地步を與へんが爲に、究極に於て終に知識の權利を解除した」近世思想の黎明期に立ちしこの哲人が、自己の人格の内面に於ては信仰の立場を擁護しながらも、神の實在を理論的領域に於ては説き得ず、「宗教そのもの、固有の内容

や獨自の本質を認識せなかつたことは、近代文化にとつての悲劇的運命であつた」と言はれる。然しながらその偉大なるコペルニクスの轉回を、一度又思想の歴史に確立し、同時に退いて認識の能力に限界を定めて以後の哲學の傾向は、一面に於て、カント以前の哲學が、直ちに神や宇宙や絶對の本體等を考察の對象として思惟したのと異り、まづ自己の主觀的内面の反省、意識作用の本質等よりして考察の歩を進め、しかも他面に於て依然として單なる認識論の立場に止まらず、深き形而上學的要求に基いて、カント哲學に於ける謎の問題として残りし物自體の解明に努力すべく端を發し、思惟によつて絶對を把握すべきことを念願し、ないし確信し、終に或は自義を以て宇宙根柢とし、或は自己と自然との同一哲學を唱へ、或は歴史に於ける神即ち絶對精神の自己實現等を説くに至つた。

て偶然的であると言ふまでもないが、フイヒテの考へた自我と非我との根柢的統一としての絶對、我といふやうなものは、もはや我とも名づけ難きものであり、更に自然は義務の感覚化せられたものに見えることが、極めて興味深き卓見であるとしても（業感縁起論に真如の基礎を與へ、カントの自然の律法者としての自己と、フイヒテのこの思想とを對照せよ）いはゆる絶對我が何故に自己を限定して存在を開展し來たるかは、再び解き難き謎とならざるを得ない。（たゞ佛教的解決ないし開顯はこゝにも亦見出し得るであらう。彼等が知識の立場にのみ終始せんとするに對し、此は知識的問題の背後に、倫理的又論理的因果の解決權をその根本として承認する。一元論は知識の根本的要求であるが、單にそれによる演繹的説明のみでは、存在の真相は完全たり得ないであらう。）もどよりフイヒテも倫理的には何等かの説明を與へてゐるが、尙ほ理論的説明とそれらと

の間には甚しき溝渠が横はつてゐる。

フイヒテはどこまでも自我といふものを中心として主観主義、精神主義の立場に止まつてゐたが、シエリングに至つては更に一步を進めて、自然が自我の現れなりとせば、我はまた自然の現れなりといふことになつた。自然は見得る自己であり、自己は見得ざる自然である。而て單にかく考ふるばかりでなく、自然的にして理想的、理念的にして現實的なるものは藝術なりとして、藝術は哲學の感官と考へられ、いはゆる自己と自然との同一哲學が成立つに至つた。その論理的過程は異なるが、これは遂に一のスピノザの本體論に至つたものといふことができやう然しながらそれでは何故に同一者よりかゝる二分の變化は起るか、絶対はビストルから打出した彈丸の如く、いかにして現實と關係するか、理解せられな

50。ヘーゲルに至つては、シエリングのいふ絶対を嘲

有、無、生成、或物、他物等々、いはゆる辨證法的發展に於て、論理の世界より自然の世界へ、自然の世界より精神の世界へ進み、かくて自然現象も文化的發展も、皆かゝる矛盾の法則より展開し成立するものであると論じたのである。

この思想の根柢には、人間の理性が宇宙理性にいはゆるロゴス或は絶対精神の現れであるといふ觀念がひそみ、而てヘーゲルに従へば、絶対精神は神そのものに外ならないのである故、神は歴史的發展に於て自己自身を實現するものとなり、即ち歴史は神の傳記であるといふこととなつた。論理學は即ち神學であり、歴史哲學は即ち形而上學である。然しかくしては人間の自覺が神の自覺であり、人間のかゝる思辨が絶対智の内容であり、神學は人間學の範圍を出でぬものとなる。自由と運命といふ如きはヘーゲルの最も愛好した論題であるが、人格の獨立的尊嚴や意志自由の如きも、終に論理的必然の運

つて、かゝるものは、其がいかにして明るい世界へ出て來るかを説き得ない、往いて歸らぬ暗い穴のやうなものだと言ひ、適つてカントの認識論を疊の上の水練と冷語し、カントの先驗的統覺としての純粹我、フイヒテの絶対我、シエリングの同一者等、それらの實在と自己及び自然の關係を説くことが不徹底なりと論じ、翻つて眞實在は凡ての變化を超越したものであるのではない、無限の變化そのものが眞實在であると考へ、而て凡ての人がその本質に則つて普遍的に思辨し得るものは論理であり、實在は論理である、我々は直ちに論理そのものより出立せねばならぬ、では論理とは何か、其は常に矛盾するものである、而て矛盾した時、そこに新しいものを見出して矛盾を脱却してゆくといふのが、論理的なるものの特質である。而ていかなるものより出立してもよいが、ヘーゲルは最も簡單なるものより出立し、且つ最も大膽なる論理の躍進をなしつゝ、

命に支配せられて運行する外なく、個體の存在といふものも、歴史に於ける宇宙理性的發展の單なる一項に過ぎないものとなる。

彼が人間の本質たる理性に對する確信もさることながら、その理性なるものは、今日の危機神學の立場より批評するが如く、自己自らに裏切られることもある所の誤謬の理性でもあり、彼が辨證法による實在の論理的無限的發展を説きながら、その自己自身の論理に矛盾して、自己の哲學を以て人類思想の最高頂なりと自任し、而も皮肉なる運命といふべきか、それとも彼の辨證法が教ふる如く、實在の發展は悲劇的矛盾の相剋にありといふことを如實に示したもののか、彼の没後幾干ならずして、彼の哲學が自然現象や文化史上の具體的現實的事實に合せないといふこと、相並んで、勢力論や進化論等の自然科学的發展を來し、彼が眞理は必ず組織であり連續であり、即ち學の體系を成すといふ自信の下に

精緻を凝らして編み上げた観念哲學も、遂に一の雄
大なる概念。詩に外ならず、砂上の樓閣に終る
ものとなつて、唯、物論の勃興を促し、彼が絶對と
しての精神は論理より自然の段階を経て人間を介し
て始めて自己自身の自覺に達すると説きし精神優位
の思想も、全く逆用せられて、自己意識的智性は、
自然的物質を根柢として、即ち大脳の發達を待つて
始めて起る、換言すれば、無意識の物理が自然の種
々の段階を経て始めて自己意識を産み出すといふ風
に、意味轉換させらるゝに至り、まさしく正反合の
法則に違はず、否それに基くヘーゲルの哲學體系を
打破つて、彼の思想は一度びこゝに悲劇的末路を告
げつゝ、シュトラウスや、フオイエールバツハや、バ
ウエルや、マックス・スチルナー等、いはゆるヘー
ゲル左派、ないしマルクス等による自然科学的唯物
論、或は歴史哲學に基く唯物史觀、社會主義、共產
主義等を發生せしめるに至つた。

大觀し來たれば、人類思想の歴史は、誤謬と迷妄
の累積史であり又その剝奪史であるといふことも痛
感せらるゝであらう。

物自體によつて吾人の感官が感觸せられることや
絶對我の自己制限や、同一者よりの自己と自然との
分化開展や、絶對精神の歴史的發展に於ける一般と
特殊の關係や、それらは何れも真理の世界に於ける
偶然性の領域である、論理に於ける説明の剩餘群で
ある。殆どいかなる哲學もかゝるゴーチアアンノツト
を免れない。之を緻密にほぐさずして只斷ち切つて
了ふといふことは、論理を封鎖し、真理を斷念する
ことに外ならない。我々の知識の要求は常にかゝる
非合理性を合理化し、偶然性を必然化して思惟の整
齊一貫を追求し確立する處に存するのである。(續)

しかも哲學の主流は遂に又この傾向に慍らず、再
び新たな意味を以て、カントに還れといふ新カン
ト運動を起すに至り、その種々の分派を出し、特に
現代に於ては、更に又ヘーゲル研究の風潮が國際的
に盛になるに至つた。しかも同時に、又これと反動
的に、かのデンマークの憂愁の哲人として、人性の
罪惡や、憂怖や、宗教的贖罪や等の深刻なる人格的
體驗と、その眞摯なる内面的反省に一生を終始した
ケルケゴールに由來する危機神學や實存在的哲學や
又はかの客觀的文化の業績を、その主觀的生成の
秘密の流動に於て把ふるテイルタイ等より發展せし
生の哲學、非合理的な歴史哲學、或は現象學、解釋
學、世界觀學等、ないし彼のアリストテレス以來の
主語主義の論理學に對して、述語主義の論理學に根
據する無の一般者の自覺的限定、及びその體系的發
展を説く西田哲學等、種々なる潮流を澎湃として今
日の思想界は感受しつゝあるのである。



聖祖の新年観

磯部満事

二〇

弘安五年の昔、日蓮聖人世壽六十一歳の正月に、駿州富士郡上野の南條七郎次郎時光氏より種々御供養申上げたるに對して、雪深き身延の御草巻に、やをら病軀を起して感謝の御執筆なるものを拜するに、春の初めの御悦び木に花の咲くが如く、山に草の生出づるが如しと我も人も悦び入りて候。

と、新春の生氣潑瀾たる御喜びの心境が躍動して居ります、これが當時起居御苦痛の御様子とは微塵も覗ふことは出来ずまい。併し其の前月即ち弘安四年の歳末に同じく南條氏の御老母宛の御返書を拜すると、それには、『文永十一年六月十七日この身延の山に入つて今年十二月八日に至るまで、此の山からは一步も他出はせない、其間八年間病もあれば歳もどつて來るし、従つて年毎に身は弱くなり心も老

耄する、殊に今年弘安四年の春からこの病氣が發つて、秋も過ぎ冬になるにつれ日々に衰弱が加はり夜々に病勢が募つてこの十餘日は既に食事も殆んど全然なくなつたのみならず、外には大雪で自然寒さが厳くて身は石のやうに冷へ固まり、體中雪のやうにつめたくなつてゐる……』(取意)とお述べになつて居ります。而して遂に其爲めか、越えて秋十月御入滅遊ばしたのでしたが、かゝる大患にあつても初春を迎へたことの大きな喜に萌へ、法悦満々たるお心持ちこそ、そこに日蓮聖人の仰ぐべき大特色が拜されませう。『正月や冥途の旅の一里塚芽出度もあり芽出度もなし』といふやうな生温いのは異つて實に活々した明朝さ、非常時日本の今日全く愉快に感じ、大に激勵さるゝではありませんか。而して次に

さては御送物の日記、八本一俵 白鹽一俵、十字三十枚、芋一俵給ひ候ひ畢んぬ。深山の中に白雪三日の間に庭は一丈に積り、谷は峯となり、嶺は天に梯掛けたり。鳥鹿は菴室に入り、樵牧は山にさしいらす。

衣は薄し、食は絶えたり、夜は寒苦鳥にことならす、晝は里へ出でんと思ふ心ひまなし。既に讀經の聲もたえ觀念の心もうすし。今生退轉して未來三五を経ん事を歎き候ひつる所に、此御訪ひに命活て又もや見參に入り候はんすらんと嬉しく候。

御供物の感謝、紙上に滾々として流れ出て居ります。又正直に衣食の缺乏困苦もあつて人里に出て、思ふ様に手當もしてみたいがどの御述懐などは、僞瞞多き詔曲の私共省みて懺悔の涙にむせぶ者であります。一面又鳥鹿等がノコノコ御草巻に入つて來ることなど實に至誠の聖人を思ふ便でありませんか。さうして結文には、

法華經實ならば此功德によりて過去の慈父は成佛疑ひなし。故五郎殿も今は靈山淨土に參り合せ給

ひて、故殿に御頭を摩でられさせ給ふべしと思ひやり候へば、涙かきあへられす。恐恐謹言

と、この末文は淨土の有無を諍つたり、大我に没入するとかせんとか種々死後の問題に就て論議さるゝ者に對して、單的に聖人のお心持ちが拜さるゝでしよう。宗教の情操はこゝに滿喫さるべきではありませんまいか、一切は心が造るのでと迷悟の實在を否定せんとする傾向ある觀心すりは警戒すべきものと思ふ、『智者學匠の身となりても地獄に墮ちて何の詮かあるべき』で、宗教は信仰が中軸で決して觀念の遊戯に卒つてはならない、勿論信仰は教觀不離であります、それは私としては法華の妙觀を擧ぐるものであります。

竊て本年は寔に岐路に立つ日本ともいふべき世界の大勢に際會致して居り、又我が統一團としても法統愛護の上に決死的覺悟を必要とする極めて意義深いこの子年の劈頭に、我が聖者の新年観を拜しまして、大に啓發されたことを衷心より感謝合掌する次第であります。

南無妙法蓮華經——

人生と法華經

(其四)

池ノ内三雄

三三

懺悔篇 第一

五、眞實の使命

思へばこの有難き經に、私の半生が符合してゐるといふことは、靈の不滅を否定したマルクス主義者や、心の顛倒してゐる衆生をして、靈の不滅を信ぜしむべき大使命を負ふて私は生れ出でたのではなからうか。(一)に靈といふのは佛性のことであるが、たとひ偶然であつたとしても、私はそこに何等かの因縁があるのではないかと思ふ。若しも私が生れなかつたならば或はこの譬論も全くたゞ譬論のための譬論として、後世に傳はるべきものを今は譬論も實語となつたのである。この法華經の譬論に就いて日蓮聖人は「當體義鈔」の中に於て、

「傳教大師釋して言く、今經は譬論多しといへども、大論は是七論なり。此七論は即ち法體、法體即譬論なり。故に譬論の外に法體なく、法體の外に譬論なし、但法體とは法性の

理體なり、譬論とは即ち妙法の事相の體なり事相、即理體、理體即事相なり。故に法譬一體といふ。」(日蓮宗聖典五三二)と申されてゐるのであるが、これは即ち、妙法蓮華經の中の七つの譬論の定義である。それは譬論品第三の大車三車の譬へであるとか、信解品第四の窮子の譬論であるとか、藥草品第五の藥草の譬論とか、化城喻品第七の化城の譬論とか、五百弟子受記品第八の無上寶珠の譬論とか、安樂行品第十四の譬中明珠の譬論とか、壽量品第十六の今述べたる良醫と治子の譬論などの七つの大きな譬論を説かれてゐるので、これ等の譬論が單なる譬論ではなく、法譬兩體を具足してゐると申されてゐるのであるが、法體が含まれてゐる故に、譬論が生々としてゐるのであるが、しかし譬論は依然として譬論である。それを實踐的にこの法性の理體を證明する爲めに生れて來たのが私なのである。それを自覺した時、私は全く法華經の有難さをしみじみと感じさせられたのであつた。まつた

の觀無量壽經や、大目犍連尊者にとつての五闍塞經や、舍利弗尊者にとつての阿彌陀經と同じ様に、否、獄中に苦悶してゐた私にとつてはもつともつと、有難く感じられたのである。まことに、佛智不思議とはこのことではなからうか。今や私はこの壽量品の久遠實成未來常住の釋迦牟尼佛の大慈悲の功德を高らかに顯揚して、これを末法五濁の恐怖大惡世の中に於て、當に、廣く、説き弘めなければならぬのだ。これこそ、私の眞實の使命であるのだ。

日蓮聖人はかの「開目鈔」の中で、

「日蓮が法華經の智解は、天台、傳教には千萬が一分も及ぶ事なければども、難を忍び慈悲のすぐれたることは、畏れをも懐きぬべし。勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此の國に生れずば殆んど世尊は大妄語の人、八十萬億那由陀の菩薩は提婆が虚誑罪にも墮ちぬべし、經文に我が身普合せり、御勸氣を蒙れば彌々悦びを増すべし。」(日蓮宗聖典四二七)と申されてゐるが、これは出家としての日蓮聖人、沙門としての日蓮聖人の悦びである。だが私の場合は正しく、佛の教に符合した、末法五濁の惡世の衆生として、法華經の教機醇熟の正機として救濟せられたる者の歡びなのである。私人の爲めに説かれたこの法華經の有難さ！ 釋迦牟尼佛の御慈悲のかたじけなさ！ 私はまつたく、法華經の正機としての法悦を心から味ひ、感謝の涙にむせんのである。

「鳥と虫とは啼けども涙おちず、日蓮は泣かぬども涙ひまなし、この涙世間のことにはあらず法華經の故に。」

と日蓮聖人は申されたが、まつたく私も有難涙を流さずにはゐられないのである。像法の世には天台・妙樂・傳教等の大師が出で、末法の世のはじめには日蓮聖人が出現して、身命を惜まずこの法華經を護持して、この世に弘められたことは、法華經に於ける釋尊の數々の豫言にまつたくびつたりと符合する所である。この正像末の三時の大集經の未來記の正しい展望はその通りに佛敎史が發展して、これを證明してゐることを知つた時、誰が釋尊の眞實の法語を信ぜずならぬやう。私が今、末法の世に受けがたき人身をこの土に受けて秘要の佛語を身讀したことを知つた時、我が身有情ならばどうして感ぜずならぬやう。私の心の中にも佛性があらばどうして動ぜず居られやう、我が身この法華經に有縁の衆生の故にこそ、佛語に應じてこの世に生れ出でたのであらう。釋尊のこの滅後佛敎の豫言と歴史とが事同してゐるといふことは、キリストの豫言とはまつたく、根本的に、相違してゐると思ふ。私はキリスト敎信者が如何に言ふとも、キリスト敎にあつては、後世に至つて、舊約聖書に符合させて作つたやうな形跡が見える様な感じがしてならぬのである。かう言つた、キリスト敎的の豫言や奇蹟については、科學の進歩した今日から言へばまつたく胡魔化しに過ぎぬ様な氣

がする。このやうなことは佛教の方にもよくあることであるが、單なる豫言の適中や原因不明の奇蹟に對する神秘的な思想を、特に強調しすぎると、必然に又、それに對する反動的な思想が起つて來るものである。現に社會にあつて、さうした神秘主義に對する最も反動的な思想は即ち、唯物論思想である。だがしかし、この唯物論者達の迷妄の一つは、不滅の靈魂に對する否定的態度である。即ち「靈魂なるものは、生物以外の空間にあるものではなく、肉體に從屬して生成された物質的な一生理機構、即ち、腦細胞の機能がこれである。それが靈魂の正體であり、それ以外に靈魂といふ超肉體的な靈魂が存在すると言ふのは靈魂主義者の誤謬である。」と唯物論者は言ふ。

これは一應正しい。しかし釋尊の教にあつては、靈魂といふものを、人間の肉體から獨立したものであるなどとは決して説いてはゐないのである。一部の佛教學者等はそれ故に釋尊の教は無靈魂主義であるとさへ言つてゐる。釋尊は、一切の森羅萬象に佛性があるといふのである。この佛性説が大乗佛教の根本思想であると私は思ふ。この佛性は、ある一面から言へば靈魂の思想から發展した一つの汎靈魂思想であると思ふ。これは又キリスト教の聖靈などは、全然異つたものであると思ふ。だがしかし、佛教の中にあつても、この佛性に對する考へ方が、その宗派によつて種々に定義されてゐる

路を辿つて來たのかも知れない。これも何かの因縁であらう。私の舊友淺野は、私の拙い獄中歌集「獄窓の下」の序文に、私のことを、

「『前略』故郷は東京に近い埼玉縣入間郡宗岡村で詩集『野良に叫ぶ』の著者、さうして、全農埼玉縣聯合の闘士澁谷定輔氏の近くださうである。また二人は語り合つたこともあるさうだ。農に生き、農に死ぬべき運命を持つた君を都會へと追ひたてたのは、荒川べりの寒村にまづおしよせてきた時代の波であらう。

ゆたかなリズムを持つ若き詩人として、佐藤惣之助氏に認められても満足の出來なかつた君は、つひに武者小路の人道主義の小説にも満足できない時が來た。それから神戸の賀川豊彦氏と京都の西田天香を訪問したがやつぱり駄目だ。すべての期待は裏切られてゆくばかりであつた。

日本労働學校城北分校（大正十三年三月開校）第一期生として入學したとき、こゝにはじめてさがしてゐたものがある。君の無産階級解放運動への一歩はこゝに始まつてゐる。その當時我國最大の労働組合、日本労働總同盟も自然生長的であつたが、關東鐵工組合の主事河田賢治氏等のことから左右に對立しかけてゐた。そこへ東部合同（故渡邊政之輔）出版従業員（春日庄太郎）關東機械工（杉浦啓一）時計工（本澤兼次）等の四組合の加盟から、その對立の足並を急

やうである。即ち、佛陀論、佛身觀等の佛性の實體に對する具體的信仰問題に入ると、各宗旨によつて、その定義は随分各種各様でまつた不統一である。これに就いては、後に本尊篇に於て徹底的に論究する考へである。又キリスト教の靈魂觀、聖靈等に對する批判も後に新約聖書を引用して、充分に論述したいと思つてゐるのであるが、キリスト教の誤れる觀念的な聖靈觀は遂に、キリスト教團の眞剣な人々をして哲學へ走らしめたのであつた。カントとかショーペンハーエルとか、又それ等より發した諸派の近代哲學の華は、まつたく、キリスト教の聖靈觀の誤謬の賜と言つてよい位であらう。それ故に、これ等の哲學は遂には、キリスト教と對立する様になり、ニイチエ、コント、ヘーゲル、フオイエルトバツハ等となつていよゝ古典的キリスト教とは對立するやうになつた。ヘーゲルの論理哲學たる辨證法が生れるや、この辨證法を發展せしめて、マルクスがこれを社會の運動としての社會進化の法則の中に於て完成したのである。これが即ち、史的唯物論となり、共產主義の哲學となつたのである。私はこの史的唯物論をまつたく、唯一の眞理であると信じ、これを私の唯一の哲學として、これに基いて私の思想は成長し、行爲は規定され、信念は確立されたのであつた。

顧みれば私の過去三十年の半生は、たとひそれが間違つた邪道であつたとは言へ、まつたく、共產主義に走る必然の經路にしてきた。これが鏡で映すやうに、學校の内部にも反映してきた。左翼は城北労働（岩内善作）を支持する小松原（城北労働）平賀（自治會）君等を中心の少数派と左翼は政治研究會城北支部準備會の名の下に集つた中溝、淺野（關東鐵工）小野（市従業員）池ノ内（農民組合）その他落合、福田君を中心とする多数派の對立であつた。さうしてわれわれは共同で家を借入れた。大正十三年八月七日東京日日新聞の夕刊は左のやうな記事を載せてゐる。

屑屋さんに

組織を與へる

貧民町植民事業

日本労働總同盟系の日本労働學校城北分校は去月下旬第一回卒業生四十二名を出したが、その中の鐵工組合員淺野、中溝、城北労働聯合の落合、金澤、農民組合の池ノ内の五氏は貧民窟の「組織なき労働者」に組織を與へる目的で貧民窟に植民することとなり日暮里、元金杉の貧民窟に、一戸を借受け五人が其處へ引越した。

日暮里元金杉界限は所謂バク師——屑拾ひの巢窟で彼等の或るものは、朝飯前に市中を「屑イ屑イ」と呼びあ

れどもそれをくはしく私は知らない。(下略)と書いて呉れたが、これも私の半生の半面を物語る點描の一つである。

恭賀新年

財團
法人 統一團

- 横濱支部一同
- 福島支部一同
- 萩支部一同

日には、女房が乞食に出て、一家が飢えを醫すといふド
ン底生活者が多く、そのために稼いでも稼いでも肩問屋
に搾取されて、その日暮らしの域を脱し得ぬのでこの際
これ等の肩拾ひを教化し組織を興へ一般労働者の程度に
まで引上げやうといふのである。五氏の企てはロンドン
のトインビーホールの事業にならんとするもので、總
同盟でも大いにこれに好意を持ち、元金杉に隣保事業を
経営してゐる愛隣團でも出来るだけの助力をすると云々
後に丹後、須永の二君も参加してきた支部長片山哲氏
や政研にあきたらなかつたわれ／＼は解散して組合運動
に走つた。主として、北部合同(評議會)へ合流して中央
支部を創立した。もう單なる對立でなく、敵か味方かに
まで進んできた。そこで池ノ内君は岩内氏の個人關係で
左右對立の中間で迷つてゐたのも一二ヶ月、斷然左翼化
した。北部が西部とともに、東部へ合同して、東京合同
となり北部支部長になつてからの君は、もう立派な左翼
の闘士になりきつてゐた。

その大正十四年の秋から、私は東海道方面主として、
名古屋、豊橋岐阜にゐた。また上京してきたのは、昭和
三年二月十七日のことである。君がやられたのはその翌
月の十五日で、たつた一度しか會へなかつたのだ。この
間は、闘士として一番よく君が活動した時期である。け

梶木氏を憶ふ

海軍少將 岩野直英

過般統一會館に於て替まれた師の追悼會に際して、
閣下の追憶談であります。
讀みて雲山に在ます師の御前に捧ぐ。
滿生

今日は故梶木顯正師のために此の盛大なる追悼會
を催されました、皆さん大勢お集りになりましたこ
とは、まことに篤きお志で私は感激いたしました次第で
あります。私にナニか感話を申上げるやうにといふ
ことですが、是は舊くから梶木上人とお交際をして
居つた者の中の年寄といふ意味で、此壇に立たせて
貰つた譯であります。

思出した事柄から申上げると、先づやはりどうも
本多日生現下のことを申さなければならぬ。本多
日生師に私がお願をして、或る日お曼茶羅の開眼式
を私の家でお客をして行つて戴いて、それから芝の

紅葉館に御案内をして少しばかり御馳走を上げて、
その時に皆の總意を以て本多師に一切經の講義をし
て戴くことをお願いしたのであります。いろ／＼維摩
經から先にやつて呉れといふ注文もありましたけれ
ども、本多師は維摩經はお嫌ひでありまして、その
時お答がなかつたのですが、兎に角大藏經の要義を
是から講じて戴くといふことになりました、「大藏
經要義」といふ書物を同時に發行することになつた
其爲には本多師は非常に勉強を致されまして、御健
康にも障るほど勉強せられたのであります。此の
「大藏經要義」刊行の事業に付て、大阪から助太刀

に駆付けて来た人が、梶木上人のお父様の梶木日種といふ人でありませう。品川の妙國寺に於て殆ど徹夜の状態で本多師は一切經を調べて、あれだけの書物を出されたのであります。其のどん／＼出来て行く所の原稿をちやんと纏めて行かれたのが梶木日種上人である。其の方が段々神經が疲勞なされて眼が悪くなつて、どう／＼頭も悪くなつてお亡くなりになつたのであります。其時に本多親下も健康が少しお悪かつたからして、私は斯んな事ではいかぬと思つて、親戚の熱海の別荘に御案内して、其處で一休んで戴いて居つた譯であります。私其處に行つたら、本多師は、自分は開目鈔の講義を完成すると言つておいでになりましたが、それに及び得ぬで品川から電報が来て、梶木日種上人が亡くなつたといふことであつた。それを聞いて私は非常に恐縮致しまして、是は『大藏經要義』の爲に梶木上人が亡くなつたとすれば、本當の事を言へば梶木上人を殺した者は岩野だといふことに思ひまして、非常にどうも申譯ない心持が致して、本多親下に御挨拶を申し上げたのであります。本多親下もその梶木上人の話

をせられて、斯ういふ譯である、非常に勉強して斯うなつたんだ、予の爲にはモウ非常な功勞者だといふことを仰せられて居りました。其時までは私は梶木顯正師が其人のお弟子だ、さうして其人の御養子さんだといふ事は知らなかつた。尤も其の前から、非常に孝行な坊さんで梶木顯正といふのが居るといふことは私は知つて居りました。けれどもあれが、此の梶木日種の子だといふことを初めて伺ひました。がさうして是が非常に親孝行だといふことを本多師申されて居りました。其の時から私は、梶木顯正といふ人は非常に親思ひの善い人であるといふことを印象づけられて、さうして統一閣でお交際をして居つたのであります。

統一閣では、私はずつと本多師が御在世の時は、モウ殆ど統一閣専門に、始終本多師にくつ附いて歩いて居つたのであります。が大正十三年に今の淺草の統一閣が出来まして、活動寫眞に依る教化運動を始めたけれども、斯んな事では教化には適しないといふのでそれも廢め、又演説講演を主にするやうになり、いろ／＼方針も變へられました。さうして

のでありませうけれども、私は言ふだけ言つて、さうして十分意見を練つて、それから今度然る上に又本多親下に當つて愈々私の信念に關する解決をしたといふ譯で、或る時は電話で以て梶木上人に、斯ういふ本を調べて下さい。斯ういふ本の何處の部分に斯ういふ事があると思ふからして、その所を調べて、何と書いてあるか、それに付て意見を立て、置いて下さい。私にも考があるから、又議論に行くから……といふやうな風で、始終統一閣に行く時分にはさういふ事を梶木上人とやつて、長い間繰返し返しやつて居りました。其爲に私に取つては餘程勉強になりました譯であります。

本多親下のあれは特長と申しますか、早速名案を出していろ／＼會をお拵へになつて、どん／＼おやりになるので、非常に忙しい。其間梶木顯正師は大正十三年から統一閣に主任としておいでになつて、さうして本多師から言へば非常に便利にと言ひますか、マア使ひよいと言ひますか、實にために盡された。それは私も成程と思ひました、あゝいふ親孝行の性質の人であるから、師匠にも少しの裏表なく、能く働いて居られたのです。さうなると私は本多親下の爲にいろ／＼盡力するものですから、自然と梶木上人にいろ／＼頼む事が澤山ありました。それで結局どうも今から考へると、大分本多親下の御威光を借りて梶木上人には御無禮をした譯になつて居るのであります。併ながら又梶木上人は私に取つては善知識でありまして、本多親下から承つた法門を私が十分吞込む爲に一應私の意見を申述べる。梶木上人に對して、あの事務所に於てどん／＼私が意見を言つて、梶木さんを困らせるまで私がやつ附ける。向ふでは此方は素人なんだから、困らせるといふより、ナーンだといふので、マアいゝ加減でお答をやめられた

それでは本多親下の事業に關すること、それから自分自身の研究に關する事に付て、梶木上人を煩したことは非常に多い。非常に長い間でございます。其の間本當に、初めに好い印象を與へられた私は、終始非常に梶木上人には満足にお交際が出来たのであります。本當に何事でも能く親切にして下さつたことを、只今皆さんの前で私は深く感謝の意を表する次第であります。

其後現下の遷化の後でも、やはり本多現下々々と
 言つて暮つておいでになりましたが、徹頭徹尾やは
 りお父様の性質を受けて、親孝行師匠孝行の精神に
 徹底して居られた。さうして御自分の私生活に於て
 は最少の要求と申しますか、リースト・エンドで、
 モウ是より儉約は出来ない、是より以上質素は出来
 ないといふ風に質素にして、統一閣では生活してお
 いでになりました。私はお坊さんとして斯ういふ珍
 しい方はないと思つて居ります。私の妻も梶木さん
 とそれから山口智光師の二人の方に成佛させて貰つ
 たのでありますが、妻の生前には一番好きなのが梶
 木上人であつた。私が好きだから自然好きと言はな
 くて、それが好きになるのですが、顔の容から、體
 格から、お経を讀む聲の工合から、頭に少しばかり
 ビリケンのある工合といふものは、實に將來、どて
 も善い和尚さんになる人であると家内なども言つて
 居りました。さういふ譯で梶木さんとの關係は是位
 の事で、他に特に私として申上げる事はありませぬ
 が、何分長い間の御交際のこととて、多分の失禮の
 ありましたことをお詫び致します。

たり、いろ／＼して居りましたが、其後お子さんが
 殖えまして、今では四人、五人といふお子さんが出
 来て、非常に御繁昌であつたけれども、悲しい哉、
 其の子供衆がお父さんと別れなければならぬとい
 ふ事になつたことは、何たるどうも悲惨な事であら
 うかと思つて、可哀相で堪りませぬ、どうか未亡人
 に於かれては、お父さん、今で言へば梶木日種上人
 の性質を受けて、親孝行の行ひを素直にして行かれ
 た所の梶木顯正上人のお子さん達が、さういふお父
 さんであつたといふことを常にお母さんから教へて
 戴いて、さうして子供も亦皆さういふ立派な孝行の
 子供に育つやうに御注意下されるならば、梶木上人
 の何よりの追善になると思ひます。

又本多師が非常にいろ／＼な種類の事業をお始め
 になつて、それに付て少しも苦とせず、何でもハ
 イ／＼と言つておやりになつた、あの師匠に對する
 又教化事業に對する奉仕といふものに私は感心して
 居りますが、今後吾々青年はあゝいふ人を手本とし
 て、やはり師匠孝行の精神を吾々は承継いで行かな
 ければならぬと信する次第であります。どうも感話
 になつて居ませぬけれども、聊か交際した間の事に
 付て想ひ出す儘にお喋りを致しまして、御挨拶に代
 へることに致します。

法華經講話

(第二十五講)

小林 一郎

妙法蓮華經方便品第二 (其九)

佛が今まで教を説かれた中に、「涅槃」といふこ
 とを幾度も説かれた。その涅槃といふのは、迷ひを
 なくすとか、或はいろ／＼の苦みを除くといふ意味
 で、涅槃といふことを説いて居つたのであるが、そ
 れは「眞の滅に非ず」で本當の事ではなかつた。た
 ゝ迷ひがなくなつた心に苦みが無くなつたといふだ
 けで、それで覺りの極致まで行つた譯ではない。人
 間は元來一人で生きて居るものではないから、自分
 一人覺つて、自分一人の苦が無くなつたらそれです
 べてが済むといふものではない。自分が覺れば他の

人を覺らせたくなる。自分に苦が無くなるにつれて
 他の苦んで居る人間をも救つて同じやうに苦の無い
 状態に導いてやりたくなる。それが出来て初めて人
 間の本性が完ふされるのであります。

お互ひがさういふ風に自分が樂になると共に他の
 人を樂にしてやらうといふ、さういふ心持の人と人
 とが相集つて、初めて人生といふものが本當の意味
 があるので、「人はどうでも自分さへ宜ければ」とい
 ふものが集つて居れば喧嘩になつてしまふ。又人が
 喧嘩をして居るのを見て平氣で居るといふのでは、
 まだ本當ではない。互に自分のみならず他の人の幸
 福を圖らうといふ心持の人はかりに向ひ合つて居れ

ば世の中に面倒は無いのですから、さうなつた所が本當の所謂「涅槃」です。滅といふのはすべてが無くなるといふ意味ではなくして、累ひが無くなる、迷ひが無くなるといふ意味であります、その煩はしい面倒な事が無くなる爲には、人々が自分の事はかり考へて居つてはいけません。自分よりも他の人の事を考へるといふやうな心持になつて、そこで初めて本當の涅槃、即ち滅が出来るのだと、斯ういふことを説かれてあります。

一體すべてのものは、其の根本を言ふと一切差別を離れて居るもののであります。世の中の事柄には

差別——變化
平等——不變化

この両面がある譯です。一方から見れば「差別」といつて皆異ふ、一方から見れば「平等」といつて少しも異はない。又差別といふことは變化といふこと

い譯です。その變る方ばかり見ると世の中はつまらなくなる。けれども、その變る中を一貫して變らな

いものがあるといふことは言へるでせう。お互ひでもさうです。生れた時には小さい赤ん坊で、それから子供になつて、年頃になつて、年寄になつて行く併しその人はその人です。
實に「諸法は本來常に自ら寂滅の相」である。寂滅といふのは變化を離れる意味で、世間に如何なる變化があつても、その變化の中を一貫して變らないものがある。これを認めなければならぬ。人間もその通りであつて、いろ／＼な迷ひも心の中にあるけれども、迷ひだけが人間の心の全體ではなくして、その迷つて何處迄行つてしまふかわからないやうな人間の心の奥の奥を探して見ると、何か定まつた道を求めて、意義の有る一生を送りたいといふ心持はある。それは佛教の言葉でいへば「佛性」と言つて佛と通ふ所の心持がある。だから迷ひの多い人間だ

になる。平等といふ所に眼を著けて見る、不變化といふことにもなる。これは両方ともに本當のことです。松の木だの梅の木だの、檜だの、杉だの、それ／＼異ふといへば皆異ふけれども、併し幹があつて、枝があつて、青い葉があるといふことは同じです。さういふことから言へば異はない。異といふこの事實の中を一貫して、異はない本性が存在して居る。これは争へない。又變化するといへば皆變化する。花が咲けば散る、月が圓くなれば虧けて行く。人間でも若いと思ふと年取つて来る。斯ういふ所からいへば皆變化するのです。併しながらその變化する中に於て、變らないものがあるといふことは争へない、例へば花が咲いて散るといつても櫻の花はいつの四月にも咲き、いつの四月にも散るだから咲いて散るといふことは如何にも無常のやうに思ふけれども、いつの春にも咲いていつの春にも散るのだから、「いつの春にも」といふ點は變らな

けれども、その迷ひの底に、迷はない心持を見つけて出して、教に依り、又道に依つて、之を育て、之を大きくして行けば、結局迷ひを離れた本當の明らかな心持がそこに現はれて来る譯です。さうして佛の道をだん／＼と學んで行つた結果は、來世に佛様と同じものにも成れるのである。

その來世といふことは、人間死んでその次を來世と普通に思ふけれども、さう思はないでも宜い、命が變れば來世です。今まで全く迷つて居つた者が覺つた境界になれば、それは世の中が變つたのであるから、やはり次の世と言つて宜い。自分の體が一度死んでから、後が來世だと思ふのは、それは淺薄な考へです。今まで迷つた人間が覺つて來れば來世です。今まで馬鹿であつたものが賢くなつて全く考へが變れば、それは生れ更つたと同じです。だから來世といふことをたゞ肉體に限る必要はない。私共が修行して全く異つた心持になつて、凡夫の境界を離

れるならば、その離れた時から來世です。即ち次の世界が始まる譯です。斯ういふ風に考へたら宜い譯であります。「來世に作佛することを得ん」今までの迷ひを離れた生活に入れば、その時から佛様と同じに成れるのだ。斯ういふことを説かれたのであります。併しながら普通の人間がいきなり佛様のやうな気分には成れませぬから、そこで佛はいろ／＼な方法でこれを教へ導かれる。その事をこれから説かれるのであります。

我方便力有りて

三乗の法を開示す

一切の諸の世尊も

皆一乗の道を説きたまふ

(我有二方便力、開示三乘法、一切諸世尊皆説一乘道、方便の力といふのは、大勢の人を教へ導いて、迷つた境界からだん／＼覺つた境界へ引入れる力といふので、その力をお釋迦様は有つていらつしやるから、それで三乗の法といふ聲聞、緣覺、菩薩の法を説かれた、相手の程度に従つて一番低い教を與へら

れることもあり、その次にモウ少し高い教を與へられることもあり、モット高い教を與へらるゝこともある。今まで四十餘年の間此の三つの階段に分けていろ／＼な教を説いたとある。

併しながらいろ／＼な高い教、低い教を説くといふことは一つの方便であつて、迷つた人間を覺らせる爲の方法手段に過ぎないのだから、結局謂へば、「一乗の道」に歸著しなければならぬ。即ちどんな人間でも佛になる本性を有つて居る以上は、自分の爲ばかりではなく他の人の爲も考へて、一切の人の爲も考へて、一切の人を救ひ、一切の人を幸福にすることを自分の悦びとするといふことを考へなければならぬ。これが佛の道、即ち一乗の道であります。結局はそれを説くので、それより外にありはしないけれどもマア初めからそんな事を言つてもわからないから、低い方からだん／＼説いて行つて、結局は一乗の道といふたゞ一つの道に歸著する。一切の世

尊(佛)がお説きになるのも皆さういふことの外には出ない。

今此の諸の大衆

皆應に疑惑を除くべし

諸佛は語異なること無し

唯一にして二乗無し

(今此諸大衆皆應除疑惑、諸佛語無異唯一無二乘)

さういふ譯だから、此處に集つて居る大勢の人達も、皆疑つたり惑つたりする心持を除くが宜しい。一體佛様といふものはどれ程世に出て、その説く言葉の精神には異ひはないのであつて、唯一にして二乗無し、たゞ一つの事である。二種だの三種といふ教があるものでない。二種三種に説くのは相手が低い程度のもだから、そこから深い方に入れようと思つて説くだけけれども、結局は一つである即ち一切衆生の悦びを我が悦びとし、一切の人の悩みを我が悩みとして、自分の骨折に依つて一切の人が救はれ、一切の人が幸福になることを望むといふ、斯

ういふ點に於ては皆一種であつて、決して二種はありはしない。

過去無數劫の

無量の滅度の佛

百千萬億種にして

其の數量る可からず

是の如き諸の世尊も

種種の緣覺證

無數の方便力をもて

諸法の相を演説したまひ

是の諸の世尊等も

皆一乗の法を説き

無量の衆生を化して

佛道に入らしめたまひき

(過去無數劫 無量滅度佛 百千萬億種 其數不可量 如是諸世尊 種種緣覺證 無數方便力 演説諸法相 是諸世尊等 皆説一乘法 化無量衆生 令入於佛道)

今までの過ぎ去つた世に於て、數限り無い永い年月の間に又數限り無い佛があつた。滅度の佛といふのは佛様は世の中に出て教を説いて、時機が來れば世を捨て、行くのですから、過去に幾度も／＼現は

れて教を説いて、又死んで行つたその佛様のことでそれは百千萬億といふ風に澤山あつて、その数は量るべからざるほどあるけれども、是の如き澤山の佛様が種々の縁——縁といふのは因縁のことで、世間のいろ／＼な出来事を例に引いて人々に教へる、或は又譬諭、様々な例へを取つて教へられる。そのいろ／＼な出来事を説いたり譬諭を説いたりするには無数の方便力と言つて、普通の人間が想像の出来ないうやうないろ／＼の方便の力に依つていろ／＼と説くけれども、それは結局諸法の相、世の中に起つて来たり消えて行つたりするいろ／＼な出来事の眞實の相をお説きになるのである。其の諸の佛様達は皆一乗の法といつて、結局は一つの所に歸着する教をお説きになる。つまり教は一種しかありはしない。自分の私を捨て、一切の人の悦びを自分の悦びとして行くといふ、さういふ教より外になにも二種三種もある譯ではない何れの佛も一乗の法を説いた。さ

うして數限り無い大勢の人間を教へ導いて、皆共に佛道に入らしめる。即ち佛様と同じ行ひをして佛様と同じ心持を以て世の中を渡るやうに導いて行かれたのである。

又諸の大聖主 一切世間の

天人群生類の 深心の所欲を知しめして

更に異の方便を以て 第一義を助顯したまひき

(又諸大聖主 知一切世間 天人群生類 深心之所欲 更以異方便 助顯第一義)

大聖主といふのは佛のこと。佛様はいつでも天上界のものや人間界に居るところの者、群生の類といふいろ／＼な生活をして居るもの、その中には種々様々な者がありませうが、さういふ一切の者の深心の所欲を知つて居る。其等の者が心の奥の奥から何を求めて居るかといふことを佛様は知つて居る。此の「深心の所欲」といふのは面白い言葉でありまし

て、表面だけ見ると、誰でも人はどうでも自分さへ宜ければよいといふ考へのやうに見える。併しそれは心の表面の方に浮んだものです。本當に心の奥で望んで居ることは、人と一緒に喜びたい、苦しむなら一緒に苦しみたいといふことです。人はどうでも自分さへといふのは本當の人間の心持ではない。だから例へば雨の降つて居る時に、傘を持たないで外へ出て濡れて、そこらの家の軒端か何かに駆け込んで、お互ひ同士が話合つて「どうも大變な雨ですナ」「濡れて困りますネ」「あなたもお濡れになりましたネ、私も濡れて困ります」と言つて話し合ふとかよい氣持になる。そこが人間の本性でせう。苦しむ事を一人で苦しんで居るよりは人と一緒に苦しめば我慢がしよい。それをどうも「あなたも濡れてお困りでせう」と言ふ時に「私は澤山着物を持つて居るから困りませぬヨ」などと言へば「嫌な奴だナ」といふことになつてしまふ。やはり苦しい事も嬉し

い事も、一緒に喜び一緒に苦しむといふことに於て吾々の満足がある。それが人間の心の底で求めて居る事です。善い事でも自分一人で善いと思つては満足しない、悪い事でも自分一人で苦しむより人と一緒に苦しめば幾らか慰められるといふそれが心の奥から出る望みである。その望を本にして教といふものが立つ。これは佛教ばかりではないすべての宗教といふものはそれである。人間の正しい心持、それを本にして教といふものが立つ。佛様は其等の事を皆知つてゐらつしやる。

天上界にも人間界にもいろ／＼生きて居るものがあるが、その生きて居るものは皆心の底を叩いて見ると自分一人で生きて居たいとは思はない。他の人と一緒に生きて、喜びも一緒に喜びたい、苦しいことも一緒に苦しんで生きたい、皆さういふやうな心持がある。それだから教へて教へられぬものは無いそれで佛は異の方便といつて、いろ／＼な方法手段

を以て、第一義を助顯したまふのである。「第一義」といふのは本當の眞實の道です。一番勝れた眞實の教、眞實の道をだん／＼と世の中の人にわかるやうにして下さる。助といふ字は次第に本當の道の中に顯で、いろ／＼と説く間に次第に本當の道を世の中に顯して行く。人間が迷つて居る時にいきなり一番高い教を説いても仕方がないから、マア低い方からだんだん説いて、順を逐うて結局は第一義といつて人間としてどういふ心を以て世に立つべきかといふその究竟の問題を明かにされるのであります。

これから以下の經文は、信仰といふもの、様々な相を説かれて居る。私共が佛を信するとか神を拜むとか言ひましても、その人の境遇事情に依つていろいろ異ふのです。その中には極く高尚なものもあるし極く卑近なものもあるし、非常に確した心持から出た信仰もあるし、又極く淺薄な目前流の信仰から入るものもありませう。けれども兎にも兎に角人間より以上の

等はありませぬから、何處で乗つても宜い。入るのはどこから入つても宜しいが、一たび信仰の道に入つた以上は、出来るだけ深く入つて行つて、少しばかりわかつたといつて途中で止まるやうなことのないやうに、これが非常に大事なことです。そこでこれから讀んで行く所にはその事が説かれて居ります。斯ういふ方法で信仰に入つても宜い、又斯ういふ方法で入つても宜い。入り方はいろいろあるから何處から入つても、本當に深入りして行けば結局佛と同じ境界に行けるのだといふことを説かれてあるのであります。

若し衆生の類有りて 諸の過去の佛に値ひ ためまつり

若し法を聞きて布施し 惑は持戒忍辱

精進禪智等 種種に福徳を修せし 是の如き諸人等 皆已に佛道を成じき

偉大なものを認めて之を信するといふ心持がありますと、その心持でだん／＼進んで行けば、結局同じ所に行くのである。併し中途で止まつてしまつてはいけない。譬へて言へば東京から下の關まで汽車が通じて居る。それに何處で乗つても宜い、東京で乗つても宜いし、横濱で乗つても宜い、静岡で乗つても宜い、乗れば下の關まで行ける。ところが乗つてすぐ降りてしまへば先までは行かれない。乗るのは何處で乗つても宜いけれども、乗つた以上は行先まで辛抱して乗つて居なければならぬ。それと同じ事で、吾々の信仰もどんな事が動機になつて信じてても宜い。けれども一たび信仰の道に入つた以上は中途で止まつてはいけない。モット深く信じて、モット深く考へて行けば、結局佛様と同じ心持になれる。途中で止まることはいけない、けれども入る時は何處から入つても宜い譯です。「東京で乗つたら下の關へ行ける、横濱で乗つたら行けない」——そんな

(若し衆生類、値諸過去佛、若聞法布施、或持戒忍辱、精進禪智等、種種修福徳、如是諸人等、皆已成佛道也)

若し人あつて過去の佛様にお値ひ申して其の教を聞いた場合に、「布施」といつて、菩薩行の一つとして、自分の餘つた物を以て人に施して、他の人の乏しさを救ふ。或は「持戒」といつて、佛様のお定めになつた戒といふものを守つて、それに違はないやうにといふ心を堅固に持つて行く。或は「忍辱」といつて、自分が正しい心持を以て人に向つた時に他の人間が不正な事をして來ても腹を立てないで、いつも他の人間を救して、だん／＼その間違つた人間を正しい方に導いて行く。それから「精進」といつて、自分の今日爲すべき事に全力を打込んで心を外に散らさないやうにする。それから禪智といふのは禪定と智慧のこと。「禪定」は自分で自分を振返つて、今自分のやつて居る事がどれほどの價値があ

るか、どれだけの意味があるかといふことを深く考へて見ること。「智慧」といふのは凡ての物の眞實の性質、眞實の相を能く見別けて行くこと。この布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧といふ六つが菩薩の六度といつて、大乘の教を實行する六つの標準でありますが、さういふ行ひをだん／＼積んで行きますと、その修行が重なつて、さうして種々に福徳を修めることが出来る。自分一人が教はれるだけでなしに、他の人間を救うて、他の人間を意味有る生活に導いて入れて行く、これが所謂福徳であります。さうしてだん／＼修行を積んで行けば、結局佛道を成ずるといつて、佛様と同じ境界に到達することが出来る。

そこで大體の上から申しますと、「知る」といふこと、「信ずる」といふこと、「行ふ」といふことの三つは、どうしても離れないものです。わかればわかつたのみでは濟みませぬ、そのわかつた事を信

ずることになる。「信すれば信じただけでは濟まないその信じた事を自分が實行することになる。若し信しないならば、知つたといつても本當は知つたのではない。「わかつたけれどもなんだか確信がない」といふ、そんなわかり方があるものではない。本當に知れば信することになり、本當に信すれば、たゞ考へて居るだけでなく、自分の身に實行するといふことになる。どうしても知るといふこと、信すること、行ふこと、いふことは離れない譯です。深く知れば信するやうになるし、本當に信すれば實行するやうになる。行ひに現はれなければ、それを知つたといふことでもなければ、信じたといふことでもない。又本當に自分のものになつて居れば、わからないことも忘れることもないのです。二と二を加へて四になるといふことは誰も知つて居る。「二と二を加へたら六になるだらう」と言つても、さう思ふ人は誰もありはしない。それは本當にわかつて居るす。

す。

諸佛滅度し已りて

是の如き諸の衆生

若し人善願の心ありし
皆已に佛道を成じき

(諸佛滅度已 若人善願心 如是諸衆生 皆已成佛道)

此の善願の心といふのは非常に面白い言葉です。「善」といふのは完全になることを求める心です。

一體人間の善惡といふことを何でさめるかといふそれは不完全な状態から完全になるやうに努めることが善であります。さうして不完全な方に満足することが善です、善惡といふことの標準は専らそれです、それ以外に善惡の標準といふものは立たない。譬へば水のやうなものです。そこの水道の水を汲んで来ればなまぬるいですが、その水道の水を熱すれば、だん／＼温度が高くなつて終に沸騰する。その沸騰する時には百度になる。それから其の水を冷せばだん／＼冷くなつて、零度になれば氷になる。

からでせう。二と二を加へたらいつでも四だと本當にわかつて居るから、誰に聞かれたつて五だとか六だとか言ふ人は無い。それと同じで、人生の本當の生き方がわかつたら必ずそれを信じなければならぬ。信じたら必ずそれを實行しなければならぬ。未だ信ぜず、未だ行はないといふのは、まだ本當にわからないのである。本當の意味で言へば、知るといふこと、行ふといふことは一致すべきものです。そこで知ると行ふとの間に、信ずるといふことが必要になる。知つて信じて、信じて行ふのです。支那の王陽明は「知行合一」といつて、知ると行ふとは一致すると言つて居りますけれども、それを精密に言へば、知つて信じて信じて行ふので、知行の間に信といふ字を一つ入れて見るとよくわかる。

それでありますから過去の世に於て、いろ／＼な佛様が教をお説きになつた。その教を信じて行つた人は結局佛様と同じ境界に成つたといふのでありま

熱湯と氷とは非常に異ふやうに思ふけれども、同じ水なのです。一つの水を冷せば氷になり、熱すれば沸騰する。それと同じ事で、吾々は凡夫でありませうけれども、その凡夫をだん／＼善くして行けば佛様になり、だん／＼悪くなれば泥棒したり、人殺しをしたりするやうな恐しいものになるでせう、佛様と大悪人といつても結局は續きます。丁度百度の水と零度の氷とが續いて居るやうなものでせう。普通の人間はその真ん中の所で、これを熱くして行けば百度になつて沸騰する、これを冷くして行けば零度になつて凍る。吾々凡夫がだん／＼善くなれば佛様のやうになり、だん／＼悪くなれば墮落して恐しいものになる。その間は續いて居るので、絶えるといふことはない。さう考へて來ますと、自分を一步步々と完全にして行くといふことが善です。それから「鞭」といふのは、進歩の途中で止まつてしまはないこと。何物でも硬くてはモウどうにも

なりはしない。軟いものはだん／＼大きくなつて、だん／＼伸びて行く。だから軟い心持といふのは、自ら現在を以て足れりとしなないで、モット伸びたい／＼といふ心持です。つまり、現在の自己に執著しないといふ心持、即ちそれが鞭です。だから善軟といふのは完全になりたいたいといふ心持、自己に執著しないといふ心持、その心持をもつて居りますと幾らでも進歩が出来る譯です。さういふ心持があつて、常に教を求めて、修行して行きますれば、是の如き諸の衆生は終に佛様と同じものに成れるといふのであります。

諸佛滅度し已りて
舍利を供養する者
萬億種の塔を起て
金銀及び頗黎
磗礫と碼礪と
玫瑰琉璃珠とをもて
清淨に廣く嚴飾し
諸の塔を莊校し
或は石廟を起て
栴檀及び沈水
木栴並餘の材
瓶瓦泥土等をもつてせる

有り

若は曠野の中に於て
土を積みて佛廟を成し
乃至童子の戯に
沙を聚めて佛塔を爲せる
是の如き諸人等
皆己に佛道を成じき

(諸佛滅度已 供養舍利者 起萬億種塔一金銀及頗黎 磗礫與碼礪 玫瑰琉璃珠 清淨廣嚴飾 莊校於諸塔一或有起石廟 栴檀及沈水 木栴並餘材 瓶瓦土等 若於曠野中 積土成佛廟 乃至童子戲聚沙爲佛塔 如是諸人等 皆已成佛道)

又佛様がお亡くなりになりました後で、舍利を供養するのに、これは印度の舊い習慣であります、徳の高い人とか、或は自分に恩のある人とかの死んだ時には、その骨を埋めた所に塔を建てる。それを塔婆と言ふ、塔といふのは塔婆といふ言葉を略したのです。大きな谷中の天王寺の塔とか、淺草の觀音様の傍にあるやうな塔を幾度も建てるわけには行かぬから、それに象つて薄い板を建てる。あの三十五

日とか百ヶ日とかいふ時に建てる塔婆は、即ち大きな塔を象つたものです。塔婆といふ梵語を若し支那の言葉に譯すれば「高顯」となる。徳の高い人とか又は自分に恩を掛けて下さつた人を記念して忘れず之を世に顯はす爲に塔を建てるのであります。舍利を供養するといふのはその事である。舍利といふのは骨の事で、佛の骨を埋めて、それに對して深き追慕の心をもつた者が、萬億種といふ數限りの無いたを建てる。その建てた塔は金銀、或は頗黎、磗礫、碼礪、玫瑰、琉璃珠、これは皆寶石の名前で、此の如き様々な寶石を以てその塔を美しく飾ります。或は石で造つたお靈屋のやうなものを建てる者もある。或は石でなくして栴檀或は沈水、或は木栴、これは皆良い香のある木です。或はその他の材料を以て、佛様を記念する爲に廟を建てる、又場合に依れ

ば瓦といつて、土を固めて拵へた瓦のやうなもの
先づ今の煉瓦のやうなものでせう。或は泥土などを
固めたりして廟を建て、佛の恩徳を記念するといふ
者もある。或は又廣い野原の中に土を積んで、佛を
まつる廟を建てる者もある。或はモット小さい事に
なれば、子供が遊び半分に川の側で沙を聚めて佛の
塔をこしらへるといふやうなこともある。さういふ
仕方はマアいろ／＼あるけれども、兎にも角にも佛
様に歸依して、これを記念しよう、又佛の徳を後に
傳へようといふ心持が出来れば、その心持を失はな
いやうにして、だん／＼育て、養つて大きくして行
けば、是の如き人は皆結局佛様と同じものになれる
此の所は餘程氣を附けて讀まないといけませんぬ。
子供が沙を聚めて塔を拵へたら、それですぐ佛に成
れる……そんなことはあり得ない。それが手始めな
ので、さういふ心持を養つて育て、だん／＼大き
くして行けば結局佛に成れると、斯ういふことで
もなる。それと同じ事で、吾々は子供の時からやは
り尊いとか有難いとかいふ心持はあるのだから、そ
れを潰してしまへばそれ切りですが、それを潰さな
いで育て、行きますと、結局は一切の人の幸福を自
分の幸福とするやうな心持になれる。初めに出た芽
生えが大事です。チョット芽の生えた所を潰してし
まへばそれでお終ひでありますから、それを潰さな
いやうにするといふことが非常に肝要です。

これはお互ひの家庭の中の教育などでもさうで
す。子供には元來物を憐れむとか、物を愛するとか
いふ心持がある。それが所謂佛性の芽生えです。そ
の芽生えを育て、大きくしてやるやうにすると、結
局は大慈悲心をもつて一切の人に向ふやうにもなれ
る。大抵小さい子供はいつも小さい／＼といはれて
居るから、憤慨して大人と同じになりたいといふや
うな心持がある。皆様も御経験でせうが、四つ五つ
の子供に下駄を買つてやるのに、足にあふやうな小

ですから此處に澤山列べてありますのは、これから
少し後に説かれてある、「漸漸に功徳を積み、大悲
心を具足して皆已に佛道を成する」といふ言葉を一
一に補つて見ればよく分る。この偈は韻文のやうに
なつて居るから、同じ言葉は繰返されて居りませぬ
けれども、その意味なのです。沙を聚めて佛の塔を
作るやうな心持があるならば、それを本にして漸々
に功徳を積んでさうして大慈悲の心を具へるやうに
なれば佛様に成れる。亡くなつた人の爲にお霊屋の
一つも建てようといふ心持があるならば、その人は
漸々に功徳を積んで、だん／＼にさういふ善い行ひ
を重ねて、佛のやうに一切の人を憐れむといふ心持
が出来たらば、その人は終に佛に成れる。斯うい
ふ事なのであります。丁度春に地面から小さい芽生
えが出る。これを初めから潰してしまへばそれ切り
ですけれども、その芽の生えたのを大事にして育て
て行くど、それがだん／＼伸びて行つて大きな樹に
さい下駄を親が買つてやる。ところが子供は自分の
買つて貰つた下駄に満足しませんで、大人の大きい
下駄を履いて外へ出るものです。これは何故だらう
かといふと、子供は成るべく子供と思はれたくない
のです。子供だといつて馬鹿にされるのは嫌だから
何か大人の仲間入りをして見たい、その心持が大人
の下駄を履くといふことに現はれる。をかしい事で
すが、どうも人間は馬鹿にされたくない。子供はい
つも子供あしらひばかりしてはいけない。子供は子
供あしらひされたくない、だからラヂオなどでも、
子供の時間といふものを特に設けて、子供向きの話
をやつて居るが、案外子供は聴いて居ないやうです
子供にも依りますが、生意氣な子供は聴いて居ない
さうして大人の時間の方を聴いて居る。やはり小さ
い者だと思はれては氣が済まない。モット大きい者
と思はれたい、斯ういふ心持があるので。だから
これを善用するやうにすれば宜しい『お前は子供だ

けれども大人になるものだ』『お前は今何も知らな
いけれども偉くなるものだ』といふやうに導いて
行くに宜しい。

人の本性として向上發展すると申しませうか、大
きくなつて行きたいといふ要求があるものです。そ
れが人間の本當の要求でありますから、その所を
本にして教へ導いて行きますと、小さい子供の時分
から、人の爲世の爲に力を盡すのは善い事だといふ
ことが、充分ハッキリはわからぬでも、何となしに
わかつて行く、やはり子供の時から其の心持を養は
ないといけない。お前は決して一人で生きて居るの
ではないのだ。お前が親切にしてやれば人も喜び、
お前がやさしくしてやれば周囲の人も満足する。小
さくても一人前の人間ナンだから、やはり周囲の人
を喜ばせるやうに、周囲の人を満足させるやうにな
つたら宜からう。斯ういふやうに小さい時から教へ
導いて行きますと、そんなに年の行かない時から、

やはり大きい廣い心持をもつて行ける。そこを押へ
つけてしまつて、『お前は子供だ、生意氣だ、黙つ
て居れ』といふやうなことを言ふと、子供は變な性
質になつてしまふ。どんな小さい者でも正しい事は
正しいのですから、その正しい事は認めてやらなけ
ればいけない。善い事は善いものだから、それを認め
てやらなければならぬ。これはお母さんがお子さん
を教育される上に於て非常に大事なことです。どん
な小さい子供でも馬鹿にしてはいけない、やはり佛
性は有つて居るのですから、佛になるやうな性質は
有るのですから、少しも教育を受けない子供でも、
時に依ると偉い事を考へ、偉い事を言ふ大人の思ひ
つかないやうな事を随分言ひもし、考へもする。そ
れを子供だからナンと言つて押へつけてしまふと伸
びない。それを出来るだけ伸ばしてやらなければい
けない。人間は皆佛に成れる本性を有つて居る。そ
れだからどんな者でも佛に成れる。

それをよく見わけてやつて、善い事を考へたら『ア
アそれは善い事だ』、善い事を言つたら『お前の言
つた事は宜しい、その道をズン／＼進んで行け』斯
ういふやうに善い方に教へ導いて行きますと善くな
る。それを途中で押へつけてしまつて伸びさせない
といふと變に横の方に外れてしまふ。これは大事な
ことであります。親とか主人とか上役とか、兎に角
人の上に立つ人は餘程それを考へないといけないの
であります。下に居る者の良い性質を育て、伸ばし
てやることを努めなければいけない。それを押へつ
けてしまつたら、折角伸び掛つたものが伸びなくな
つて結局變な者になつてしまふのであります。

それでありますから、此の所もその意味で見れば
宜しい。子供が沙を聚めて佛様の塔を造るといふや
うなことは何でもない事だけれども、さういふ心持
をだん／＼教へ導いて、だん／＼に進んで功德を積
み世の中の役に立つやうな行ひの出来るやうにして

若し人佛の爲の故に 諸の形像を建立し
彫刻して衆相を成せる 皆己に佛道を成じき
(若人爲佛故 建立諸形像 彫彫成衆相 皆已成
佛道)

又佛の形像を石に刻んだり、木に刻んだりして
それを建て、置く。所謂彫刻して様々な美しい形像
を現はすのは、即ち佛や菩薩の徳を後に遺す爲にさ
ういふものを世の中に傳へるのである。斯ういふ行
ひをして居る人があるならば、これも前に申したや
うに漸々に功德を積んで終には佛と同じものに成れ
る。

或は七寶を以て成し

鐵鉢 赤白銅

白鐘及び鈺錫

鐵木及奥び泥

或は膠漆布を以て 嚴飾して佛像を作せる

是の如き諸人等 皆己に佛道を成じき

(或以ニ七寶一成 鍍銀赤白銅 白鐵及鉛錫 鐵木乃與 泥 或以ニ膠漆布一嚴飾作佛像一如是諸人等一皆已 成佛道)

七寶といふのはいろ／＼な寶石、さういふものを
以て佛様の像を拵へたり、或は又鍍銀、赤白銅、
白鐵、鉛、錫といふやうないろ／＼な金屬、或は鐵
とか木とか泥とか、或は膠漆布といふのは布の上に
漆を塗つたり、膠を塗つたりして、それに佛様の像
を描く。さういふやうなものを以て美しい立派な佛
様のお像を作る、さういふいろ／＼な方法で佛の像
を現はして、大勢の人達にこれを拜ませるといふ、
その心持は尊い心持でありますから、それがだんだ
ん進んでモット多く修行して行けば佛の道に入るや
うになる。

この縁を空しくしないといふことが必要です。人
間の萬事は縁といふものに依るので、縁が悪いとい
けない。だから良い縁を興へるといふことが必要で
す。因と果といふことは誰でも始終言ひます。原因
に依つて結果が生ずるといふことは誰でもよく知つ
て居る。歐羅巴の學者などでも因果關係(Causality)
といふことを言ひますが、併し精密に考へて見ると
因だけで果は出來ない。そこに縁といふものが入る
縁が善くなければどんな善い因でも果は出來はしま
せぬ。その所は歐羅巴の學者よりは佛敎の方が餘
程精密です。因があればそれだけで果があるとと思
のはこれは極く粗末な考へです。例へば物を食べれ
ば身體が肥るから、食べるといふことが因で身體が
肥るといふことが果だと思ふ。所が腸加答兒か何か
で腹を下して居る人は、幾ら食つても／＼肥らない、
食ふほどだん／＼瘦せてしまふ。それは縁が悪いか
らである。さういふ事は幾らもある。だからいつで

も因と縁と揃はなければならぬ。因とはその物の性
質、縁とはその周囲の境遇事情です。だから折角善
き縁を得たならば、その縁を無駄にしないやうにし
て行くことが吾々にとつては非常に大事なことであ
ります。佛の敎に歸依するのも、どんな動機で歸
依しても宜しいから佛様を拜みたいといふ氣分にな
つたら、それは善い縁ですから其の縁を無駄にしな
いやうに、だん／＼深く入つて行つてさうして世の
中の爲に人の爲に力を盡すといふやうな氣分になつ
て行けば、初めはつまらない動機であつたにしても、
それが本になつて其の人は限り無く勝れた者になり
結局は佛に近いものにも成れるのであります。

そこで縁を空しくしてはいかぬといふ、その事を
此處によく言つてあります。子供が沙を聚めて佛の
塔を造つたのでも、それは善い縁であるから、それ
を本にしてモット善くやれよと言つて獎ましてやれ
ば、結局佛のやうなものに成れる。或は石や鐵で

佛様の像を造つたり、七寶を集めて佛様の塔を飾つ
たりする。それだけではつまらぬ事だらうけれども、
それを本にしてモット深入りして本當の道を求むる
やうにして行きますと終には佛と同じ境界にも到れ
る。皆これは縁の尊いことを説いて居る。それで善
き縁を興へるといふことは非常な功德であります。
經書して佛様の
自らも作し若は人を
してせしめたる 皆己に佛道を成じき

(緣畫作佛像 百福莊嚴相一自作若使人 皆已成佛道)

百福莊嚴の相といふ、いろ／＼な福を具へた美し
い佛像を書き描いたり、或はその像を描くのに自分
で描いても宜し、又人をして描かしても宜いのです
が、さういふ風に佛の像を描いて、多くの人にこれ
を拜ませるといふやうな心持がありますと、その心
持がモット進んで行けば、結局佛様のものゝ境界

にも近づいて行く。

人間は尊いものを知らないといふことが一番悪い。善いものを善いと思はなければ、自分が少しも進歩することはないので、世の中の缺點ばかり探して居る人は、缺點ばかり探して一生終ひです。いつ迄も善くなりはしない。世の中に幾ら悪い者があつても、その悪い中にも善いものがあるから、その善いものを見出してそれを育て、行かうといふ心持がなければ、自分でも更に進歩しないし、世の中も善くならない。「どうもつまらない」と言つて居る者は、結局自分がつまらないから悪い方ばかり見て居るのであります。どんな事であつても善き縁を求めて佛を敬ひ、佛を拜むといふ氣分に成れば、それがだん／＼本になつて自分が佛様の境界に近づいて行く。モット進んで行けば佛の教化を助けて、世の中の人を教へ導き世の中を救つて行くといふ働きも出来て参ります。そこから結局佛道を成すると

飛びには行かぬけれども、だん／＼に世の中の爲にも人の爲にも力を盡すやうになる。さうして大悲心といつて、一切の人間の悩みを救ひたいといふ心持を起す。

これは前にも申しましたけれども「慈」といふのと「悲」といふのは積極的と消極的の異ひであつて、慈といふのは自分の骨折に依つて大勢の人の幸福を増して行きたいといふ氣分、悲といふのは自分が骨折つて大勢の人の苦しみや悩みを減してやりたいといふ氣分、これを兩方併せて慈悲と言ふ。慈が有れば必ず悲がある。皆を幸福にしてやりたいといふ心持があるならば、衆の苦みを除いてやりたいといふ心持は自然に起る。又衆の苦みを除いてやりたいといふ氣分が有れば、其の幸福を増してやりたいといふ氣分に必ずなりますから、慈と悲は必ず揃ふ譯です。所がその慈悲が完ふされない場合が多いのは何故かと言へば、折角人の爲に力を盡して居りながら兎角

いつて、その人が佛に近づいて行く。

乃至童子戲 若草木及筆 或以指爪甲 而畫作佛像 如是諸人等 漸漸積功德 具足大悲心 皆已成佛道 但化諸菩薩 度脫無量衆

乃至童子の戯れに 若は草木及び筆 畫きて佛像を成せる 是の如き諸人等 漸々に功德を積み 大悲心を具足して 皆己に佛道を成じて 但だ諸の菩薩を化し 無量の衆を度脱しき

凡夫の迷ひがそれに混じて来る。そこでどうもうまく行かないのです。人が苦しんで居る時には救つてやる。所がその人間が自分より幸福になつて来ると「馬鹿々々しいナ、こんな事なら初めに骨折つてやるのではなかつた」斯ういふやうな氣分が起つて来る。電車の中で人の爲に席を立つて「サア此處へお掛けなさい」と言ふ時は宜いけれども、その内に自分が疲れて来ると、むかふの人が羨しくなり、立つてやらなければ宜かつたといふやうな氣分が起る。人の氣の毒な状態を憐れんで見ても、その人間が自分よりモット幸福になると不快を感ずるといふやうなことが、凡夫には有り難いのです。それでは慈悲を完ふする譯に参りませぬ。

そこでその慈悲を完ふする爲には「喜心」といつて人の喜びを飽くまで一緒に喜んでやる心持、これが最も大事です。氣の毒な時には自分が骨を折つてやつても、相手の人が幸福になつた時に之を妬むと

いふやうなことであるならば、折角の慈悲が貫徹し
ませぬ。だから慈悲を貫徹させる爲には、人が幸福
になつたら飽くまで一緒に喜んでやうといふ心持
が常になければならぬ。吾々が乞食に金をやる時に
は可哀さうだと思ふばかりでなく、相手は金が無い。
こつちは多少でもあるのだから、そこに或る誇りを
もつて居る。ところが其の乞食が案外財産を持つて
居て貯金をして居るなど、聞くと『馬鹿々々しい、
その位ならやらなければ宜かつた』と思ふ。人の苦
しいのを憐れむといふことは難しいやうですけれど
も、まだ、易しい。人の幸福のを一緒に喜んで
やるといふ心持の方が難しい。どうも凡夫の習ひと
して自分よりも勝れた者を妬みたがる、憎みたがる
といふのが常です。だから幸福な人を本當に心から
一緒に喜んでやるといふことになつて、そこで初め
て自分の心が大きくなり廣くなる。吾々は常に喜心
といふものを養はなければならぬ。

そこで人の幸福を一緒に喜んでやるといふ心持に
なれば、之に續いて「捨心」といふものが起る。即ち自
分が骨折つた事などは忘れてしまふ。自分が人の爲
に骨折つてやつた其の結果が良ければ、それを一緒に
喜んでやつたらそれで宜い。「俺が骨折つてやつ
たのに何故禮を言はないか」……そんな事は考へる
には及ばぬ。そこでこの喜と捨がないといけない。
ところが此の捨心といふものが非常に難しい。親切
にしてやることも難しいが、併し自分の親切にした
ことを自分で忘れるといふこの修行は更に難しい。
例へば満洲事變が起つて、満洲に行つて居る兵隊さ
んの慰問をする爲に奮發して金を出す。そこは宜い
けれども、お禮状が来ないと「なんだ馬鹿々々しい
禮が来ない。此の位なら出さなければ宜かつた」と
いふ考へが起る。それではいけない。善い事を考へ
るのは、善い事その事が悦びであつて、それに對す
る報酬を期待することは間違つて居る。其の報酬を

期待しないといふ心持が捨心であります。これが非
常に大事です。報酬を期待して居ても、こつちの思
ふ通りの報酬は来ないかも知れませぬ。例へば吾々
が子供を育てる時には、子供を育てるのは自分の務
めだと思つて育てなければならぬ。「この子供が大
きくなつて親孝行をして、美味い物を食はして呉れ
るだらう」ナンと思つて居ると子供が中途で病氣を
して死んだ時にはガツカリする。それではいけない。
善い事は善い事、そのものが善いのであつて、それ
に對する報酬などを期待する必要はない。
そこで此の慈悲喜捨といふ四つの心持が揃ふのを
四心相應といつて、そこで初めて本當の慈悲が出来
る。たゞ慈悲々々といつて人に情を掛けるだけでは
いけない。人に情を掛けるには、是非とも喜心と捨
心がこれに伴うて、この四つの心持がいつも揃つ
て行かなければならぬ。さうなれば何も人から報い
られなくても腹を立てることもなければ、人に認め

られなくても何とも思ひはしない。それが所謂大悲
心を具足して、一切の人間の苦を一緒に心配してや
るといふ心持です。一切の人の苦しみを一緒に心配
してやるのだから、今度は相手が幸福になつたら一
緒に喜んでやる。さうしてその人を幸福にする爲に
自分が骨折つた事などはモウ忘れてしまふ。此の喜
捨の心持があつて、初めて大悲心が貫徹するのであ
ります。これは口で言ふのは易いけれども、實際や
つて見ると難しい。どうも自分の骨折つたことは、
忘れることが出来ない。けれども本當はそれでなけ
ればならぬ。大悲心を具足致しまして、佛様と同じ
やうな心持になれば、佛様に近くなつて来る。
それだから佛様が教を説く時には、但だ諸の菩薩
を化してごある。菩薩といふのは幾度も申すやうに、
自分一人が助かるだけでなく他の人をも助けたい、
自分一人幸福になるだけでなく、他の人も幸福にし
たいといふ心持の人で、斯うなれば、だん／＼と佛

の境界に近づいて行ける。又さういふ者が先に立つて行けば、他の者も自然同じ気分になるから、無量の衆を度するといつて、数限り無い人間をだん／＼覺らして行くことも出来る。人間はいろ／＼其の程度が異ひますから、程度の高い人間を目標にして教を説いて、さうして低い方の人もだん／＼それに附いて来るやうにする。斯ういふことが必要であります。

これは普通の教育に就ても同じであります、いつも教育を受ける人の程度に合わせて教育したのでは本當の教育は出来ない。その點に於て私共はこの頃の普通教育といふものにいつも不満を感ずる。「こんな事はわからないだらう」といつて、子供にわかる事だけ教へたのでは人間は善くなりはしない。少しはわからない事でも無理に教へる位でなければ、人間といふものは進歩しない。鳥がカア／＼、雀がチュウ／＼ナンといふことばかり學校でいつまでも

教へて居つては駄目です。少しはわからない事を教へるが宜い。わからぬ事を努めてわからせる位の考へがなければ、人間の進歩といふものはありはしない。それだから高い標準を立て、低い者をそこにグン／＼引上げて行くといふことが必要です。「彼奴は馬鹿だからつまらぬ事を教へて置かう」「彼奴は悪人だから、あまり善い事は望むまい」そんな事を言つて居つた日には、この世の中は善くなりはしない。だから高い標準を立て、低い者をグン／＼と、其の高い方に引上げて行くといふのが、佛の世の中を教化する道である。現在の状態に満足して居るなら、宗教も道德も要つたものではない。その現在の状態からモット進んだ境界に行かなければ何んにもならぬ。それには少しは無理でも高い事を教へて、さうして其の高い方まで導いて行かなければならぬ。斯ういふ點に於て私は今我國で行はれて居るやうな教育のやり方ではいけないと思ふ。あんなに

習ふ方の人にはばかり順應して居てはいけない。習ふ人を教へる人の境界に引上げなければいけぬ。少しは無理でも、努力しないで善くなるものはありはしませぬ。その所は能く考へなければいけないと思ふ。

さういふ點からいつても、私は歐羅巴を方々歩いて見て、日本の現在が如何にも無氣力に思はれます。日本ほど放逸な、我儘なことを許して居る國は無い。英吉利へ行つても、獨逸へ行つても、日本よりしつかりして居る。ベルリン邊では電車に乗つて見ると、子供が大人に席を譲る。大人が入つて行く時、子供は必ず立つて席を譲る。席を譲らなければ車掌が行つて立たしてしまふ。それは國內の者にだけではない、外國人にでもさうです。吾々も外國人だが、電車の内に入つて行く時、子供がスツと立つて席を譲つて呉れる。若し譲らない者があれば、車掌が行つて「お前お立ち」と言つて立たしてしまふ。此の位

の事はあつて宜いと思ひます。子供は大人の厄介になつて育つもので、大人は世の中の爲に骨折るものだから、大人が入つて來たら子供は席を立つ位のことはあつて然るべきものである。我國ではさう行かない。なんでも子供々々といつて、子供を大事にするのはよいが、「親は子供の犠牲になつて居ればそれで宜い……」といふ。そんな事でどうなるものですか。「自分はいつでも子供さへ宜ければ」と言ふ、其の子供が又「自分がどうでも子供さへ宜ければ」といつて、代々斯んな事ばかり言つて居つたら世の中はどうなりますか。勝れた者に對しては劣つた者が服従する、後から一心になつて附いて行くといふ気分がなければ、世の中といふものは善くなるものではない。その所が現在の我國では洵に足らないと思ひます。

佛教の方ではさういふ放逸な事を許さない。勝れた者を標準として立て、劣つて居る者でも出来る

だけ努力して、勝れたものに附いて行き、その指圖を求め、其の教を求め。さうして向上發展して行く上へ〜と進んで行く。斯ういふことが佛の教へ方であつて、そこが缺けて居つたのでは、世の中いふものが本當に善くなりはいない。その點がどうも我が教育界などには甚だ足らないのではないか。モウ少し眼を醒さなければならぬだらうと思ふのであります。外の國を見ますと案外しつかりして居りまして、我國へ歸つて見ると如何にもそこが弛んで居るやうに思ひました。だから佛様は菩薩に成るといふことを本にして教化をされるので、無量の衆、數限り無い大勢の者がその高い方に從つて来るやうにする。それが本當の教へ方です。

若し人塔廟
華香燭蓋を以て
若は人をして樂を成
さしめ

實像及び畫像に於て
敬心にして供養し
鼓を撃ち角貝を吹き

簫笛琴笙篳

是の如き衆の妙音

或は歡喜の心を以て

乃至一の小音をもつ

てせし

皆己に佛道を成じき

(若人於塔廟 實像及畫像 以華香燭蓋 敬心而供

養 若使二人作樂 擊鼓吹角貝 簫笛琴笙篳

瑟鐘銅鈸 如是衆妙音 盡持以供養 或以歡喜心

歌頌頌佛德 乃至一小音 皆已成佛道)

或は又塔廟とか、美しい佛様や菩薩の像に、花だの香だの燭や天蓋を捧げたりして、眞面目な心持を以てそれに供養する。或は又自分で音樂を奏することが出来なければ、他の人に音樂をなさしめて、鼓を撃つたり笛を吹いたりして、或は簫、笛、琴、笙、篳、琵琶といふやうないろいろな樂器を奏して佛に供養する。或は歡喜の心を以て歌を唄つて佛の徳を頌めたり、或はチヨットした小さい聲で以て佛を讃めるのでも宜い。佛様が有難い、佛様は尊いといふ

ことを話し合ひ、語り合ふといふことをするならばそれが本になつて後には眞に佛に歸依する心持になり、さうして佛の教を實行するやうにもなりますから、それから尙だん〜に修行を積んで行きますと、佛様と同じものに成れる。

若し人散亂の心に
畫像に供養せし

乃至一華を以て
漸く無數の佛を見たてま
つりき

(若人散亂心 乃至以一華 供養於畫像 漸見無

こゝに散亂の心とありますが、さう言つては失禮ですが、あなた方や私共の心は散亂の心です。佛の事にのみ専らになれないのです。本當に純粹な心持になるといふのは容易なことではない。本を讀んで居つたら其の本に魂が打込まれて、どんな音がしてもそれが聴えない、どんな香がしてもそれを感ぜないといふやうになつたら宜いでせうが、容易にさう

は行きはしませぬ。佛様に掌を合せて拜んで、お題目を唱へて居つたり、念佛を唱へて居つても、外でブウ〜といへば「アツ自動車を通るナ」と思ふ。それでは心は専らでありはしない。心は他に行つて居る。要するに散亂の心持です。吾々共は心が専らだと思ふけれども、自分の氣の附かない間に他の心持がそこに混じて来る。本當に純粹の心持になつたら、どんな音がしても聞えない筈です。どんなものが現れても見えない筈です。けれどもさうは容易になりにくい。だから散亂の心持で、あつちへ惹かれたり、こつちへ惹かれたりする、これが凡夫の心持です。併しそれでも宜いといふ。その散亂した心でも宜いから、佛に歸依して佛を拜むといふ氣持になれば、其處からだん〜進むと、後には散亂しない心持になれる。

初めは散亂した心持でも宜い。たとひ一つの華でも佛様の畫像に供養するといふ心持が起ると、それ

が縁になつて、だん／＼進んで行く。数限り無い佛様を見たてまつるやうになる。此の見佛といふことは佛様の姿が眼の前に浮ぶといふやうな、そんな事ではない。佛と一緒に居るやうな気分になることである。佛様の姿が眼の前にちらつくなどいふのは、神經衰弱が何かでせう。そんな事ではありませぬ。佛と一緒に居るやうな気分になることで、見といふのは心に映つて來ることです。佛の教を學んでだんだん修行して行くと、佛様は二千年も三千年も昔の方であつても、佛を禮拜して居る時には、さながら佛と共に居るやうな心持になれる。それが見佛であります。数限り無い佛を見たてまつるといふのは、有らゆる佛と心が通ひ合ひ、佛と共に住むやうな気分になるといふことです。さうしてだん／＼と自分も佛の境界に近づいて行くだらうといふ自信が得られる。

或は人有りて禮拜し 或は復た但だ合掌し

つて、自分も佛様のやうな心持になり、さうして数限り無い大勢の人間を教へ導いて、無餘涅槃に入る。涅槃には無餘と有餘と二つあるので、有餘といふのは一通りわかつたけれども、まだ本當でない所があるので、佛教の小乗の教だけ覺つたものが即ち有餘涅槃である。自分では吾が心に迷ひが無いやうな気分になつたけれども、まだ大勢の人を教へ導くだけの力が具はらない、まだ先がある覺り方。それから無餘といふのは、自分一人が覺ると共に他の人までも教へ導く力が具はることです。そこで有餘涅槃から無餘涅槃に入る。涅槃といふのは覺るとか、或は迷ひの無くなるこかいふ意味でありますから、一通り覺つたつもりでも、自分一人で覺つて居て、他の人を教化する力の無い間は有餘涅槃。それから自分が覺ると共に他の人を教へ導く力が具はつた時は無餘涅槃です。無餘涅槃に入つて、世の中の爲に力を盡して行つて、結局は此の世の中を去つて行くので

五八
乃至は一手を擧げ 或は復少しく頭を低れて
此を以て像に供養せし 漸く無量の佛を見たて

まつりて
自ら無上道を成じて 廣く無數の衆を度し
無餘涅槃に入ること 薪盡きて火の滅ゆるが如
くなりき

(或有レ人禮拜 或復但合掌 乃至擧二一手 或復少低
頭 以レ此供二養像 漸見二無量佛 自成二無上道
廣度二無數衆 入二無餘涅槃 如薪盡火滅)

或は佛様の像を禮拜したり、或はたゞ掌を合せて拜んだり、或は片手を擧げて禮拜したり、或は少しく頭を垂れてチョットお辭儀をするといふやうなことであつても、さういふことを以て佛の像に供養して、佛の像を祀つて行きますと、それが縁になつてだん／＼無量の佛を見たてまつり、多くの佛と一緒に居るやうな気分になり、さうして自然に無上道を成するやうになる。これは自分の心が佛と一つにな

あるけれども、その去つて行く場合には、薪が盡きて火の滅えるやうなものだから、何の苦悶も無ければ、何の煩悶も無い。

これは日蓮聖人が「先づ臨終の事を習うて、然る後に他事を習へ」といふことを言つて居られる。先づ自分が死ぬ時の事を習つて、それから生きて居る間の事を考へるといふ、この意味はウツカリする間誤解があるので、臨終を習ふといふことは、いつ死んでも後悔の無いやうにせよといふことです。今此處で死んでも少しも後悔の無いやうな生き方をしなければいけない。自分の命數を自分で定められはしませぬ。八十までも生きるかも知れず、今晚死ぬかも知れぬ。それは誰でもわかりはしないが「その時に慌てないかどうか」と言はれると、多くの人はチト怪しい。人間は無常で、いつ死ぬかわからぬといふことは知つて居るやうなものだけれども、實は能くは知らない、人生は無常だ、今晚死ぬかも知れ

ぬなど、口で言ひながら、まさか俺は今晩死にはすまい」と思つて居る。その『まさか』が恐ろしい。私共のやうに白髪が生えて來ると、友達の中でだん／＼死ぬ者が多くなりませんが、「この次は誰だらう、マア俺ではないだらう」と思つて居る。だから今日する事を今日しないのです。人から手紙を貰つて、今日返事をすれば宜いのに「イヤ明日やれば宜いと思ふ。何か用があつて、今日すれば宜いのに」イヤその内にやれば宜い」と思ふ。日本語には「いづれその内」ナンといふ都合のよい言葉がある。「いづれその内に上ります」と言ふが、明日だか明後日だか一年先だか十年先だかわからない。たゞ「いづれその内」でやつて行く。ナニ今日しなくてもいづれその内やれば宜い。さう言ふ内に死んでしまへばそれまでの話である。だから「いづれその内」と言ふやうな人は所謂臨終を知らない人である。人間いつ死ぬかわからぬといふことを本當に知らないか

宜いから、それから深く佛様を信じて、その信じた心持を又だんだんと深めて行けば宜いのであります。

若し人散亂の心に

一たび南無佛と稱せし

塔廟の中に入りて

（若人散亂心 入於塔廟中 一稱南無佛 皆已成佛道）

なか／＼急に純粹な心持になれませぬから、最初は外に惹かれ易い心持でも宜しいから、さういふ心持でも塔や廟の中に入りて南無佛と言ふ。南無は歸依すること、佛様に歸依するといふことを口に言ひましてさうして一心に佛を拜むことが出来るならば、それが縁になつて結局佛に近いものになつて行く。

諸の過去の佛の

是しの法を聞くこと

現在或は滅後に於て、

有りし、

皆已に佛道を成じき

（於諸過去佛 現在或滅後 若有聞是法 皆已成）

らである。そこで常に臨終を習うて、今死んでも後悔の無いやうな生き方をする。今晚バタリ倒れても今日爲すべき事を完全にやつて居れば少しも後悔はない。斯ういふのが所謂薪盡きて火の滅するが如しで、死ぬべき時が來れば死ぬのですが、爲すべき事を爲し、果すべき責任を果して死んだならば、少しも後悔は無い譯です。

そこを平生吾々は考へて行かなければならない。斯んな事を言つて居る私自身なども、なか／＼不精で、手紙を受けて返事を書かなかつたり、約束を果さなかつたりして居りますが、若し私が今夜死んだら、随分見つともない事かも知れませぬ。何時死んだつても後悔は無い、本當に生きる効があつた、今まで生きただけの事はして居ると、斯ういふ確信の出来るやうにして行きたい。それが薪盡きて火の滅するが如くといふことです。それはなか／＼急には行かないのですが、初めはどんな淺い動機からでも

佛道一

過去の佛の世の中に居らるゝ間でも或は其の亡くなつた後に於てなりとも、この佛様のお説きになつた教を聞いて、その教を深く心に信じ身に行ふものは終に皆佛に近いものになれたといふ。此の教を聞くといふことは、心に信じ身に行ふことの本になり得ます。今の私共は佛様にお出會ひ申して親しく教を聞くことは出来ませぬから、已むを得ず佛のお遺しになつた教を文字に書いたお經といふものに依つて知るのではありませんが、併しお經を讀むのには三つの讀み方がある筈です。第一は口で讀む、これが始めであるけれども唯だ口で讀むだけではつまらない。佛優が舞臺へ出て物を言ふのと變りはさせぬ。佛優は日蓮聖人になれば「南無妙法蓮華經」と言ひ、親鸞聖人になれば「南無阿彌陀佛」と言ふ。定九郎になれば「五十兩置いて行け」と言ふ。口先だけなら何にもなりはしない。吾々が口先だけでお經を讀

むのは俳優が舞臺で言ふのと少しも違はない。その讀んだ事を能く辨へて心に深く之を信じなければならぬ。それを『心讀』と言ふ。心で讀むといふのはそのお經に書いてある事を心に味はうて『成程ここだナ』と深く思ふこと、それが心讀、即ち心に信ずるといふことであります。併しながら心に思ふだけではいけないのであつて、自分の身の行ひに現れて初めて本當の力になる譯です。思ふだけで行はなければ思はないと同じです。思ふだけならば種々の事が思へる。『あの人は可哀さうだ、金も百圓やりたいナ』と思つても、やらなければ何にもならない。それだから思ふだけでなく、自分の心に行はなければいかぬ、その身に行ふことを『色讀』といふ。色讀といふのは身のこと、凡て形のあるものを色といふ、即ち心讀色讀、心に讀み、身に讀む。言ひ換へれば心に信じ身に行ふ、斯うなつて初めて經を讀んだ効がある。即ち眞に佛の教を學んだ者といへる譯

を理想として進んで行くべきであります。

此處までの所でチョット一段落になりまして、これは過去の佛の事を説いてある。過去に於て斯ういふ事があつたのだから、今日に於ても又これから後に於ても、必ず斯うなければならぬ。これから後の世に於ても佛の教といふものは少しも變らないのだから、これを信じて行けば千年萬年後になつても必ず佛の教が世の中に生命を有つて行くに違ひない。この偈は大分長いのでありますけれども、大乘佛の修行の意味を能く盡して居りますから、あまり急がないで一歩々々と進んで行くやうにお話をしようと思ひます。

です。併しながら先づ口で讀むのが縁でありますから、口で讀むことを決して馬鹿にしてはならない。やはり初めは口で讀むがよろしい。口で讀んでそれが心に落着いて信するやうになつた時が心讀、心に信する事が行ひに現れた時が色讀でありますから、口で讀むことを縁と致しまして、心讀色讀して行きますれば教と自分とが一致して行くので、それを目標にしてお互ひに勵んで行く譯であります。佛の名を唱へたのではつまらぬけれども口に佛の名を唱へたのが縁となつて、モット深入して心に佛の教を信じ、身に佛の教を行ふといふことになれば、その人が佛と同じ道に入れるのであります。此處に説いてある事はいろいろな善き縁を擧げてあるのであります。お互ひも此の中のどれに當るか知りませぬが、よく思ひ合せて見れば何れかに當つて居るでせうから、その善き縁を本にして更に深入りして、結局佛の教を身に行うて自分も佛の境界に行くといふこと

偶 吟

大八木義雄

十一月一日熱田神宮御遷座式の朝

にひ宮に遷らせたまふけふの日を神も嬉し
と思し召すらむ

同夜御遷座式拜觀の時

み明しの消えて仰けは虚空にゆには守ること
と星のきらめく

十一月二日参拜の時

千重五百重人を集へる雲見山許し待ちてま
ゐのほるへく

折にふれて

願はくは教を受けむみ佛のさしのへたまふ
み手にすかりて

★

★

★

(記) (事)

本部團報

釋尊御成道會 臘月八日夜の四更正覺を成じ給ひて三千年、幾億萬の人類が救済されたか一人の力克く木劫の燈明となつて長夜の闇を照さるゝであらう。法華經に云く「世尊未だ出で給はざりし時は、十方常に闇冥にして三惡道增長し、阿修羅亦た盛んなり、諸天衆轉た滅び死して多く惡道に墮つ」と、恐るべく誠むべきである。宜なる哉近來は眞言の徒と雖も、この成道會を嘗み佛恩の洪大なるに感激して居る、況や日蓮門下に於てこの聖日を忽諸に附してはなるまい。午後二時より本部に於て法要後和實義見師、中村清一氏、磯部滿事氏等に依つて大恩報謝の法話會が催された

の註釋者は今迄世上に殆んど見當らない。而かも法華經十卷の開經として不離なもの此際奮つて御講合せ來聽あらんことを爲法國にお勤めする、御希望の方は瑞書にて御申越されば招待券を贈呈する便宜もある。因に當講座は正月第一木曜日は休講、第二木曜日から開く豫定。

横濱教誌

日曜日講集 毎週日曜日午後二時から四時半時として五時迄本部に開催され、信仰増進の意義深い會合が營まれて居る。清流には魚棲ますの諺もあるが、迷信打破、類似宗教撲滅せずんば邦家の前途憂心の至りである。男女を兼はす志士仁人の來會を歓迎する。幹部協議會 十二月六日便宜上日本橋俱樂部に於て、本團幹部會を開催して時局重要問題に對して審議する處あつた。いづれ事實化して各位にまみゆるであらう。彌先較御令室を喪はれた横濱の伊藤喜造氏は活動盛りの貴重な境地を犠牲として其の追善供養の爲め、當分本部に於て身施を申込まれた事は有難い奇特の事である。十一月三日 中區南太田の川又氏方にて、唱題の後、磯部先生より新講鈔の御話をきく同 六日 日山家 本信院妙容日美善童女弟一周忌に相當。讀經供養の後、磯部先生の御法話。同 九日 磯子の高橋氏方に於ける例會和實師、磯部先生、東京より御來講。同 十二日 神奈川區鶴屋町の原田氏方に唱題修行。同 十三日 中區宮崎町の石毛氏方にて磯部先生の祈禱鈔の讀講。同 十七日 山縣家御令息の第百ヶ日に相當。磯部先生の御法話。同 二十一日 久保田氏夫人急逝。午後一時より二時まで、自宅にて告別式をさる。同 二十三日 伊藤氏夫人終にみまがる。通夜、小西師、東京より御來演。同 二十四日 磯子の大内氏方にて法蓮小西師、磯部先生の御法話。同 二十五日 伊藤氏夫人深信院妙唱日定信女聖位の告別式が、同氏宅にて、正午より一

時までの間に催された。小西師が導師とならる。同 二十七日 神奈川區三ツ澤の齊藤氏方にて例會、小西師 磯部先生の御法話。同 二十九日 伊藤氏夫人の初七日、小西師の御廻向あり。

福島支部報

十一月四日午後六時、福ビル三階會議室
一、開會の辭、 岩井支部長
一、宗教の教育化について 福島高商學生 夏谷泰次郎君
一、其の罪華へ已りて 福島高商學生 橋本 辰居君
一、日蓮主義と現代 河合妙明先生
一、日蓮聖人の信仰 磯部滿事先生
一、閉會の辭 岩井經夫少佐
河合先生、現代非常時の再確認より國民精神振起の必要を説かれ、宗教の本質と、法華經の統一を強調される。磯部先生更に信仰の具體的態様を淳々説示せられ、會議室一杯の聽衆法悦に滿さる。最後に伊藤高商校長の發聲

二本松教信

十一月五日 午後一時五十七分遺骨一基通過
因つて出迎讀經す。
同 六日 福島市縣教育會館の文部省主催思想問題講習會に出席す。
同 七日 日本久寺御會式修行並に説教
日蓮聖人の御一代 笹本 量義師
追善供養に就て 中島 元道師
同 八日 蓮華寺御會式並に説教(晝夜二回)
追善供養に就て 山 主 中島 元道師

日蓮聖人の御生涯 監督布教師三上義敬上人
同 十四日 不焚會托鉢修行。
同 十五日 午後七時十一分遺骨一基通過す
因つて出迎讀經す。
同 十八日 双松康、二本松劇場の二ヶ所に
同 十九日 於て免因保護事業安達佛數慈善會活動寫眞會開催す。

福島縣聯合至道會理事 亘理 正信氏
同 廿日 午後七時十一分遺骨二基通過す
因つて出迎讀經す。
同 廿四日 午前十時蓮華寺に於て信徒多數參詣の上總本山妙滿寺よりの國壽法要並に法話のラゲオ放送を拜聽す。

寄附金維持及團費誌料領收

(自十一月二十一日 至十二月三十一日)

一金 參圓也	東京 宇野 博順殿	一金 壹圓也	大阪 小島 三平殿
一金 壹圓貳拾錢也	奈良縣 出口馬太郎殿	一金 貳圓五拾錢也	東京 小峰 豐子殿
一金 壹圓也	宮城縣 野々村好二殿	一金 壹圓貳拾錢也	名古屋 相澤 みき殿
一金 貳拾圓也	東京 柴田 武治殿	一金 貳圓貳拾錢也	東京 岩崎 清八殿
一金 貳拾六圓拾錢也	同 上	一金 貳圓貳拾錢也	大阪 澤田萬壽殿
一金 四拾八錢也	大阪 山乃神傳道閣殿	一金 貳圓貳拾錢也	水戸 前刀 實清殿
一金 壹圓也	東京 越山雄四郎殿	一金 參圓也	千葉縣 風戸 三藏殿
一金 貳圓五拾錢也	横濱 日山興三郎殿	一金 貳圓也	東京 中原 通應殿
一金 貳圓五拾錢也	東京 三須久三郎殿	一金 貳圓也	萩 村田よし子殿
一金 貳圓貳拾錢也	同 石川 顯陸殿	一金 貳圓貳拾錢也	東京 沼部彌太郎殿
一金 貳圓貳拾錢也	中津 有田 日連殿	一金 貳圓貳拾錢也	京都 金光 日心殿
一金 貳圓貳拾錢也	東京 小島貴久子殿	一金 貳圓貳拾錢也	横濱 榎田藤三郎殿
一金 貳圓五拾錢也	横濱 西村 喜勢殿	一金 貳圓五拾錢也	東京 岸 邦太郎殿
一金 貳圓貳拾錢也	東京 大橋爲次郎殿	一金 五圓也	東京 櫻井しげ子殿
一金 貳圓貳拾錢也	同 星野 純義殿	一金 五圓也	宮下きく子殿
一金 五圓也	同 大原 重雄殿	一金 貳圓貳拾錢也	山田 英二殿
		一金 貳圓貳拾錢也	小西 日喜殿
			安井 源吉殿

右難有領收入帳仕候也
財團法人統一團會計

念告

「財施も法施も更に優劣あるべからず」と釋尊は布施を獎勵遊ばしてゐます。願くは私共の教化運動御清授の御厚慮を以て誌料は何卒前金にお願申上ます。
猶團費と誌料と御混同なきやう、正團員は年額金貳圓五拾錢、其他巻頭の略則御一覽の上宜敷お願申上ます。

財團統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖語錄 改版 送料共	全	金壹圓八拾錢
法華經要義 賜天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	全	金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值	全	金貳拾五錢
法華經要品	全	金五拾錢
日生上人レコード	全	金參圓廿五錢
日蓮聖人	全	金拾錢
本尊意識に就て	全	金貳拾錢
礦部通事通輯	全	金壹圓七拾錢
本多日生上人	全	金拾錢
勸行作法	全	金壹圓
河合勝明著	全	金壹圓
皇道と日蓮主義	全	金壹圓

東京市小石川區音羽町六一ノ七
財團法人統一團出版部
振替東京東九四〇番

月刊「教」誌

申込所 東京市小石川區音羽町六丁目

「教」發行所

振替口座東京一〇九四〇番

發行所 財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

東京市小石川區音羽町六丁目一七
編輯兼 磯部 滿事
發行人 大辻 松太郎
印刷所 都 印刷所
電話高輪六〇二四番

昭和十年十二月廿四日 印刷納本
昭和十一年一月一日 發行
(第四百九十號)

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
致候
▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

價定一統
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半々年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

不許複製
定價一冊 金壹圓貳拾錢
送料共
送一年前金 金壹圓貳拾錢
送一ヶ年前金 金壹圓貳拾錢

目 次

聖訓摘要	日生上人
日蓮宗概観	梶木顯正
日本國と立正大師	井上一次
法華經講話(第二十六講)	小林一郎
記事	

○本部團報各地教信 ○寄附維持金團費誌料領收

第十四一年二月號

統

一

附
團
統

團
發
行